法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-12

大蔵虎明上演年譜考

Hashimoto, Asao / 橋本, 朝生

(出版者 / Publisher)
法政大学能楽研究所 / The Nogami Memorial Noh Theatre Research Institute of Hosei University
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
能楽研究 / 能楽研究
(巻 / Volume)
31
(開始ページ / Start Page)
51
(終了ページ / End Page)
105
(発行年 / Year)
2007-07-31
(URL)
https://doi.org/10.15002/00007396

Hosei University Repository

大蔵虎明上演年譜考

橋本朝生

はじめに

大蔵弥右衛門虎明は大蔵流宗家の一三代に数えられる狂言役者である。父の虎清とともに江戸時代における幕府抱えとしての大蔵流狂言の地歩を確かなものとし、また台本や伝書をまとめることで後代への礎を築いた人であり、能における世阿弥に比すのは大げさだとしても、「大蔵流中興の祖」とされてきたことは肯けよう。

この虎明の生涯については、既にかなり詳しく明らかにされている。まず笹野堅氏が同氏校訂『わらんべ草』(岩波文庫、昭和37)の「解説」で、その著者たる虎明について紹介された。また米倉利昭氏は『わらんべ草(狂言昔語抄)研究』(昭和48)の「わらんべ草の著者大蔵虎明考」で、『わらんべ草』研究の前提として虎明の学問習得を中心に生涯について考察された。

これらは『わらんべ草』巻五に見える「家之系図」や自伝的部分(以下、虎明自身の言葉により「自讃」とする)、大蔵八右衛門家文書(『日本庶民文化史料集成』四、昭和50、に池田廣司氏により翻刻)等に依拠するものであったが、近年

Hosei University Repository

上演記録の探索・整理が進み、虎明が日々何を演じていたかということが把握できるようになった。米倉氏は『徳川実紀』の演能記事に狂言役者名が記されていないことから「狂言界における虎明の活躍については、ほとんど知る事が出来ない」とされたのだが、それがある程度わかるようになったのである。近年また、台本や『わらんべ草』以外の文書・伝書の類が相次いで紹介された。これをも整理しつつ、上演記録を中心に、いま改めて虎明の生涯を追うこととしてみたい。(注1) なお父虎清については既に石塚道子氏「狂言師大蔵虎清考」(『能—研究と評論』12、昭和59・5)が備わり、参考にさせていただいた。

一　出生、幼・少年期

虎明は、「家之系図」によれば大蔵弥太郎虎清の子として山城国相楽郡平尾で生まれた。後にあげる自筆本の奥書に見られる年齢や没年・享年から逆算して慶長二年(一五九七)、虎清が三二歳の時であり、虎清はその前年、三一歳の時に狂言大夫号を賜ったと「家之系図」にある。「大蔵家系図」(早稲田大学演劇博物館安田文庫蔵岡田紫男『猿楽聞書』所収、原無題)によれば、母は金春座小鼓方幸小左衛門月軒(五郎次郎正能)の娘で、後に離別され、京で亡くなったという。大蔵弥右衛門家と平尾との縁については関屋俊彦氏「大蔵虎政と平尾」(関西大学『国文学』80、平成12・3)に詳しく、祖父虎政が織田信長より拝領したという知行地が明治初期まであったとのことで、平尾で生まれたのは確かであろう。「家之系図」に「後奈良ニ住ス」とある移住の時期については不明だが、幼い頃であったかと考えられる。幼名は慶長一〇年一〇月四日の記録に「くま」とあるのがそれらしく、熊蔵であったのだろう。『近代四座役者目録』(能楽史料『校本四座役者目録』)に父虎清の童名でもあったとある(ただし、記録の類には亀蔵とある)。後述するように虎明の長男も熊蔵であった。「くま」の記録以前から弥太郎の名が見えているが、これは記録の整理によ

Hosei University Repository

るものであろう。いつから弥太郎を名のるようになったのかはわからない。

「自讃」に五歳から稽古を始め、六歳の時春日若宮祭後日能で狂言を演じ、その頃は六歳で稽古するのは珍しかったので大夫号を許されたとある。五歳は慶長六年、この年の薪能への出演が『薪能番組』によって確認でき、七年にも続けて出演している。その後しばらく記録がないのは『薪能番組』の記載態度の問題で、曲名・役者名を記していないためで、幸い八年には『薪芸能旧記』によって出演したことがわかるが、それ以後も続けて出演したのであろう。六歳の大夫号受領については「家之系図」、同じく『わらんべ草』[注2]に引く朝山意林庵が虎清を讃えた「道倫碑銘」、間狂言本各巻の奥書にも同様に記すが、『春日若宮祭礼能番組』にこの年の記載がなく、確認することはできない。ところで春日社家日記『慶長八年正月吉日日記』の一一月二七日条に、

後日能在之、入逢【　】ニ果候、金剛・今春・勧世ニ而候、弥衛門子、地蔵舞之狂言沙汰候、大夫被成候也、□能不【　】。

とある。[注3]実は一年後、七歳の時のことであったらしい。〈地蔵舞〉のシテは幼童にふさわしい役だが、易しくはない。演じたとすれば認められたのも肯けようか。ただし『わらんべ草』の元となった『昔語』の乾坤本（この本については後述）の坤巻の「自讃」に当るところには「狂言ハかなづのぢざう也」の上注がある。〈金津地蔵〉の子の役ならより幼童にふさわしい役である。なお『薪芸能旧記』には慶長八年の十二日に、

不腹立狂言　甚六　弥太良　鷺　三人トモニ太夫ニ被成畢

とあるのだが、これもあやしい。

「自讃」には次に、慶長一八年、一四歳の二月の末に初めて駿河へ下ったとある。八〇段の抄にも一四歳で駿河・江戸へ下ったとあるのだが、慶長一八年ならば一七歳のはずである。ところで八〇段抄にはその前に、虎清たちが駿

Hosei University Repository

河へ召されたのを虎明一〇歳の時としている。慶長一一年ということになる。ところが、能楽四座の役者の大坂詰が廃され、駿河詰に改められたのは『当代記』によれば慶長一四年三月のことである。虎清は一二年に江戸、一三年に駿河に出向いており、石塚氏「狂言師大蔵虎清考」が言われるように活動の重心をそちらに移しつつあったようだが、本格的に駿河そして江戸での活動が始まるのは一四年から、虎明一三歳の時である。どうも虎明による年齢の記載(記憶とすべきか)は三年ほどずれているらしい。先の大夫号受領の年齢もやはり疑っていいようである。

駿河・江戸に下るまでの間に弟八右衛門清虎が生まれている。清虎の没年について八右衛門家文書の八右衛門家の『由緒書』に寛文一二年(一六七二)と二年の二説があり、享年は五三とあるので、前者とすれば元和六年生まれになるのだが、小山弘志氏が「伊達文庫「古之御能組」と江戸初期の能・狂言」(『東京大学教養学部人文科学科紀要』39、74、昭和41・12、57・3)で指摘されたように、後者をとって慶長一五年生まれとしたい。上演記録の初出は『薪能番組』元和八年二月一〇日の、

狂言　聟入　大倉弥太郎・同弟

であろう。後掲「南都両神事能索引」は「虎明の早世した弟らしい」とするが、『古之御能組』の番組に翌年から八右衛門の名で見えており、この弥太郎弟は清虎に違いない。[注4] この時三歳では早すぎ、一三歳と見るべきであろう。とすれば虎明より一三歳の年下になるのだが、『春日正預祐範記』元和八年三月一二日条に、

高安太郎左衛門、夢想連歌興行、(中略)弥太郎兄弟、狂言不及是非次第、舎弟十一二ノ者也、

とある。[注5] この弟も一三歳の清虎である。小山氏の指摘にも拘らず、いまだに虎明と清虎の年齢差が二三とされることが多いのだが、この資料によって明らかに否定できる。清虎の母は「大蔵家系図」によれば、観世座笛方の春日市右衛門の妹である。従って、これ以前に虎明は実母と別れたことになる。

Hosei University Repository

なお「大蔵家系図」によればこの他に妹が三人おり、上は「ジロ」で、金剛座脇方の高安太郎左衛門の妻となり、真中は早世、下は「クネ」で、虎清の弟子で触流（幕府御能係役人）となった松井喜左衛門の妻となるが、「母駿河腹也」とある。

ここまでの上演記録は存疑のものを含めて一五回。【別表1】に弥太郎とする記録をすべてあげたが、他資料に弥右衛門とするものはあやしく、それらを除いて、シテを勤めたのは前述の〈地蔵舞〉の他は〈鶏聟〉など、アドは〈柿山伏〉〈不腹立〉などで、少年の役として妥当なところであろう。

なお米倉氏「わらんべ草の著者大蔵虎明考」は虎清の東下以降は母方の祖父である幸月軒に指導を受けたかとされる。確かに六二段に幼少の時「狂言の諷、拍子やう」を習ったなどとあるが、やはり狂言は父に習ったとすべきであろう。虎清は慶長一五年に京大坂、一六年に和歌山での記録が見られるなど、江戸に居続けたのでもないのである。そして虎明を含め、妻子は奈良にいたのであろう。「自讃」に一八歳の時とあって、例によって年齢はあやしいのだが、駿河か江戸の藤堂和泉守邸で親騭（宗玄）に葛城のことを尋ねられたとあるのだが、「其方ハ大和に居住なれば」と言われたとある。奈良の居所については、八右衛門家文書の『狂言始り』の虎清の項に慶長二〇年に「弥右衛門儀其頃紀寺近所に罷在候」とあり、虎清の移住以来、現在の紀寺町の近くだったのであろう。(注6)

二　活躍期―上演年譜から

慶長一八年、駿河に下った年には記録が六日分見られる。八右衛門家文書の弥右衛門家の『由緒書』に、

慶長十八丑年二月於駿府御能之節初而御用被　仰付

とあるのは記録が残らないが、東下の時期について確認できる。三月一一日の三の丸慰み能については「自讃」に詳

Hosei University Repository

しい。前日に命じられたが、虎清が煩いで出られず、〈右近〉の間をまだ知らなかったのでその夜のうちに稽古したとある。なおこの時家康の同朋福阿弥[注7]に「頭取」を初めて命じられてめでたいと言われたとあるが、その日の狂言方の責任者というほどのことであろうか。

なお『わらんべ草』巻五の「ゆるし共、取し覚」に、「兵法長刀」を「駿府にて、十四歳の時、けいこ致し」とあるのだが、先と同様の年齢記載の誤りである。

その後の三年間の記録はないのだが、元和三年からは江戸での記録が見える。虎清についても同様なので、いつ江戸に移ったのかはわからない。ただ年次不明ながら『わらんべ草』には「予わかゝりし時、するがにて」（七段抄）など、駿河での記事が少なくないので、しばらくはいたはずであり、この年に江戸に移ったと考えておきたい。江戸の居所については笹野堅氏「狂言の発生と発展」（『能楽全書』五、昭和19）に引く正保二年（一六四五）の『江戸屋敷付』に「鋸引町」とあるのを遡らせていいだろう。木挽町、現中央区銀座である。

その頃には既に結婚していたらしい。長男熊蔵が生まれていたらしいのである。熊蔵については「家之系図」の虎明の項に、

〈熊蔵〉と云子有、十四才にして、江戸にて卒ス

の書き込みがあり、また「大蔵家系図」に、

奈良ニ而生江戸にて死行年十四母ハ金剛右京妹也

とある。熊蔵の上演記録は寛永四年（一六二七）から見え始めるが、虎明がアドでつきあってのシテが多く、記録を見るだけでも大事に育てられていることがわかる。そして寛永七年まで五一回を数えるのだが、五月の金剛大夫浅草勧進能でぷつりと切れる。これはこの年に亡くなったためではないか。そう仮定して逆算すれば、元和三年生まれとい

Hosei University Repository

うことになるのである。しかも奈良で生まれたという。虎明はそれ以前に金剛右京妹と結婚し、奈良に本宅があったということになろう。少し早い感もなくはないが、あまり違わないだろう。

なお弥右衛門家の『由緒書』に、虎清は元和三年に、それまでの一五人扶持に加えて「大和国添上郡之内知行百弐石御朱印被　下置其後配当高九拾石被　下置候」とある。知行地は金春大夫と同じ添上郡中ノ川村(現奈良市中ノ川町)で、日本歴史地名大系『奈良県の地名』(昭和56)によれば「慶長郷帳」に大蔵弥太郎の知行とあるとのことである(ただし石高は六四・一九石)。表章氏『能楽と奈良』(昭和55)は豊臣秀吉の時代に拝領したものだろうとされる。この時に徳川幕府によって安堵されたのであろう。やはり大蔵家の本拠は奈良で、記録のない三年の間にもしばしば帰っていたのであろう。

そして元和三年からはほぼ毎年の記録を晩年に至るまで見ることができる。【別表1】の通りで、これまでのものを含め収集しえた記録は、同じ日でも一曲を一回と数えることとして八〇三回(うち四一回重複)である。[注8] これが虎明一生涯の出演回数のどれくらいを占めるのかはわからないが、寛永三年、四年などはその年のほぼ全曲と見ていいのではないか。本稿はこの表を提示することが主たる目的なのだが、以下そこからうかがえることについて考察しておきたい。なおこうした演能記録の整理は既に表章氏「南都両神事能索引」(『能楽研究』16、平成3・12)、演能記録調査研究グループ(代表　表章氏)「江戸初期能番組七種」(『能楽研究』18、19、24、平成6・3、7・3、12・3)でなされており、この表はそこにある虎明の記録に若干の例を追加したに過ぎない。

1　『わらんべ草』の記事との対応

『わらんべ草』にある記事で記録にも見られるものはあまりないのだが、「自讃」にある地震の話は記録によって年

Hosei University Repository

次が特定できる珍しい例である。台徳院(秀忠)の時、本丸の能で「七番めに、ぬけがらの狂言」を虎清と演じていた折しも大地震があって大騒ぎになり、小さかった家光たちも内へ入り、舞台にいた役者たちもみな逃げたのに、秀忠一人悠然と座っていて、虎明たちも舞台に座ってやり過ごし、落ち着いてから演じ続けてほめられたというのだが、『古之御能組』によって元和四年四月二日のことと判明する。九番目の狂言なのだが、〈脱〉に「此狂言ノ内ニ大なへゆる」の注記があるのである。『御城諸家御能組』ではアドは権之丞とするが、『わらんべ草』を信じるべきだろう。田口和夫氏は「元和偃武の地震」(『能楽タイムズ』444、平成元・3。『能・狂言研究』平成9、に収録)で、松平伊豆守信綱の言行説話を書き留めた『智能抄』に、曲名を〈鬼の清水〉とするがこの話があり、「家光公御年十二」などとあることから元和元年のこととされたが、記録の方を重んじるべきだろう。ただし地震のことは他の記録で確かめることはできない。

八九段の抄にある〈石橋〉をめぐる論議については石塚氏「狂言師大蔵虎清考」に詳しく、虎清も論争に関わっていて、『わらんべ草』の記述が自己中心的であるとされている。寛永六年八月二五日の一回目の上演については、アイの記録がないが、二回目の寛永一三年五月一〇日の分が『江戸初期能組控』に〈獅子〉として見え、虎明がアイを勤めたことは石塚氏が指摘された通りである。また虎明のことではないが、「自讃」に寛永一二年三月晦日に虎清が家光より「にたりの面」を拝領したとあるのが『寛永雑記』で確認できることは、これも石塚氏が指摘された通りである。

その他、五段の抄の「松平陸奥守正宗殿へ　／太猷院様、御なりの御能」が寛永元年二月二〇日か、四五段の抄の「金春宗竹代に、江戸浅草にての、勧進能」が寛永五年三月二一日からか、同じく四五段の抄の「江戸浅草にて、北七太夫勧進能せられし時」が寛永六年七月二三日からか、といつたことがわかる。

しかし対応させられるのはこれくらいで、四七段の抄にある見物にまで墨を付けたという〈墨塗〉など、記録によっ

Hosei University Repository

ても年次を特定することができないものが多い。「自讃」に「卯の年の二月廿三日より、大坂にて、勧進能、大蔵庄左衛門いたされしに」とあるのは、池田英悟氏「大坂の勧進能―延宝以前―」（武蔵野女子大学『能楽資料センター紀要』12、平成13・3）に指摘される通り慶安四年（一六五一）のことなのだろうが、これも記録がない。

2　虎明の立場

虎明は大蔵流宗家の長男であり、幼少の頃から宗家の後継者として遇されていたであろう。前述の春日若宮祭での大夫号受領や駿河での頭取の件もそれを示している。出始めた頃の江戸城での演能では、まず弥右衛門（虎清）や鷺仁右衛門（宗玄）のアドを勤め、日によって一曲のシテを勤めるというのがふつうである。それが少し変って、シテを勤めるのが多くなってくるのが、寛永中期頃からである。

これは「自讃」に三二歳の時、即ち寛永五年に「金春座の頭取請取し事、親存命の内に、頭取渡し、れいなし」とあることと関係するのであろう。この「頭取」は金春座狂言方のリーダーという意味なのであろう。武悪・鼻引・猿・賢徳の「頭取へ渡る面」を「親よりすくに請取」ったとあるのが、それを示している。若い頃にはアドばかり勤めたのが、その後シテばかりになる曲として〈粟田口〉〈墨塗〉〈文相撲〉などがあるが、おおむねこの頃からなのである。

寛永七・八年には虎清より「狂言印可勘状」を受けている。これが現存しており、関屋俊彦氏「大蔵弥右衛門家蔵『狂言印可勘状』」（『能と狂言』1、平成15・4）に紹介されたが、これについて『わらんべ草』の「本書奥書写」に「三十の比、親より、印可、感状を取」とある。寛永七年には三四歳である。相変わらず年齢を間違っているとすると、頭取になったのもその後ということになるのだが、どうだろうか。

「ゆるし共、取し覚」に一九箇条（「七」を墨滅して「九」と訂するが、『昔語抄』では一七箇条であった）を列挙するうち

Hosei University Repository

に、この「印可、勘状」や前述の「兵法長刀」も含まれるのだが、その他は武道・古典・宗教関係で、このうち武道にかかわるものはこの頃までに習得していたらしい。伝授者の顔ぶれから米倉氏「わらんべ草の著者大蔵虎明考」が考証された通りである。

宗教関係では、天台と真言の阿字観までを慈眼大師より相伝されたというが、『狂言始り』に「大猷院様　上意を以東叡山へ三年相詰慈眼大師御弟子に相成勤学仕翁三番三狂言之大事共御相伝御自筆之御印可被下」とあり、『わらんべ草』六段(段数欠)抄に「慈眼大師の御時、とうゑい山へ、一両年相詰、翁の太事承候」と年数は相違するものの同様にあることと関係する。慈眼大師天海との関係については関屋俊彦氏「「大蔵虎明と天海」序説」(『国文学』83・84、平成14・1)に詳しいが、天海より寛永一二年に相伝された巻子本が現存するとのことである。東叡山での修行はもっと前のことであったろう。なお東叡山寛永寺への秀忠御成能が寛永六年三月一七日にあったことが『寛永雑記』に見えるが、残念ながら狂言の役者名までは記されていない。しかし関屋氏が言われるように、六三段の抄にある「江戸とうゑい山にて、大僧正様、御能の時、わき能、邯鄲にて(中略)間ハ、我等其時云合仕候」とあるのがこれらしく、狂言も演じたに違いない。天海は寛永一一年に近江坂本の東照宮遷座のために上洛したが、閏七月二八・二九日に坂本の里坊で勅使饗応の能が催されたことが『平田職忠・職在日記』に見え、二八日条に、

今朝神前法事以後、僧正、里坊ニ而勅使へ御もてなし、能日吉大夫・狂言弥大郎、

とある。[注9] 虎明は七月には二条城、九月には仙洞御所での能に出ており、この頃京都にいたらしい。

前述のように寛永七年に長男熊蔵が亡くなったらしいのだが、六年には後継者となる次男が生まれている。後の栄虎で、「大蔵家系図」によれば母は同じ金剛右京妹である。

そして寛永一一年には家督を相続する。八右衛門家文書の「御ゆい物に被下候はんと被仰御書おき被成候一つ書之

Hosei University Repository

事」を弥右衛門・八右衛門宛に書いているのだが、家督を継ぐ上に知行・書物・道具類七点を譲り受けるというのである。七点のうちに「大坂平之町弐町目」の家屋敷もあり、大坂の平野にも家があったことがわかる。八〇段には虎清が天満にいたとあるが、移っていたらしい。七点を譲り受けるというのは、それ以外は譲り受けないということでもあって、これは弟清虎が八右衛門家を樹てることと関係するものであろう。なお虎清が清虎を偏愛し、虎明と清虎の仲が険悪であったかのように言われることが多いが、記録から見る限り共演は当たり前で、この頃から特に変ったということも認められない。

一体慶長・元和期には異流共演が当たり前であったのが、寛永五・六年頃から同一流派による上演がふつうになってくることは池田晃一氏「江戸初期の狂言界—演能記録よりみて—」（『能—研究と評論』7、昭和52・8）に指摘されているが、虎明の独立はそのこととも関係する。そして間狂言本を、寛永一二年一二月に「脇能之間註」「修羅之間註」、一三年一月に「鬘類註」、二月に「集類註」と著したこともこれらの動向と関わるものであろう。

これらの本は間狂言各曲の本文を記すだけでなく、書名に「註」と付すように、本文に出てくる人物・土地・故事等について、その出典を示すもので、そこに引用された書物については米倉氏「わらんべ草の著者大蔵虎明考」に示されているが、多方面にわたりおびただしい量である。古典関係で印可を受けたとするのは「徒然草」「伊勢物語」「源氏物語」だけなのだが、それだけにとどまらない虎明の修学のありようを示すものである。しかも米倉氏が言われるように、完成後にも頭注や追記を加えたことが明らかで、研鑽を怠らなかったのである。

なおこれらの本の奥書には前二書に「干時三十九歳」、後二書に「干時(惟時)四十歳」とあって、ようやく年齢が正しく記載されている。署名は「弥太郎虎時」である。虎明は若く虎時と名のっていたことがわかる。奥書に同じく「弥太郎虎時」とあるものに、二五段抄・二六段に言及される狂言装束付の『衣裳付の本』、〈翁〉の起源伝承に始まり、

Hosei University Repository

狂言・間狂言の心得を記す『代伝抄』、間・拍子舞の詞章を載せる『間・拍子舞』があり、ほぼ同時期の著作であるらしい。

いつから虎明を名のるようになったのかははっきりしない。〈三番三〉の秘伝を記す『式三番』には「大倉弥太郎虎明」の署名があるが、年記がない。弥右衛門を名のる時期もよくわからない。記録は正保二年の薪能からだが、前年の記録がなく、この頃とするしかない。

虎清は寛永一五年の薪能に出たことが『薪芸能旧記』によってわかるが、これを最後に記録に現れず、引退したらしい。そして「家之系図」に「奈良ニシテ、行年八十一、正保三年、七月二十四日ニ卒ス」とある。虎明が虎清のアドを勤めたのは寛永一三年が最後で、その後シテを勤めることがさらに多くなる。〈犬山伏〉〈今参〉〈末広がり〉〈比丘貞〉〈武悪〉〈米市〉などはそれまでアドばかりであったのが、シテばかり勤めるようになる。狂言本、いわゆる虎明本が成るのは寛永一九年。狂言を伝えていく立場を考えてのものであろう。そして虎清が亡くなる前年、正保二年に間狂言本・狂言本すべてにその奥書加判を得ている。

父虎清との関係については「自讃」に、

同(注、家光)御代、正保二年の夏の比、御二之丸にて、御能有しあけの日、御本丸へめし、太田備中殿を御使にて、親より上手になるハまれ也、しかるに予ハ、親にはるかにましたると思召す、ことに子共迄取立し事、御感なさるゝ也、

と、将軍の口を借りて、父より優れていると言う。しかし『近代四座役者目録』には、

親ヨリ声小音ニテ、芸マヱ(異本、小マヱ)也、三番ノ舞モ、親ヨリハ劣ル。乍去、達者ニ狂言スル。

とある。これが世間の評価だったのであろう。

Hosei University Repository

そして『近代四座役者目録』には、これに続いて、

権之丞ト同位ニ云。併、今ハ、弥右衛門増タルヤウ、世上ニ云。ヒイキ〳〵ニ両人ハ云也。

とある。他流、当面鷺流との間では虎明はどういう立場にあったのか。『わらんべ草』で鷺流の役者、ことに伝右衛門を悪しざまに言うことはよく知られている。虎明と同時代の仁右衛門（権之丞）は、長命徳右衛門の子で、宗玄の養子となり跡を継いだ宗慶（一一代とされる）、伝右衛門は宗玄の甥、初代政俊であるが、演能記録を見るに、虎明は仁右衛門よりやや下位に見られていた節がある。

虎明が出演した最も大きな会としては、元和九年八月の家光将軍宣下能、慶安四年八月の家綱将軍宣下能があげられよう。これらを見るに、いずれも初日の〈三番叟〉は鷺流の役者が勤めている。家綱宣下能の場合は『将軍宣下能番組』によれば、初日に観世大夫の〈翁〉で、鷺伝右衛門が〈三番叟〉、権之丞が〈蟻風流〉を勤め、二日目に金春大夫の〈翁〉で、八右衛門が〈千歳〉、弥右衛門が〈三番叟〉、三日目も金春大夫の〈翁〉で、八右衛門が〈三番叟〉を勤めているのである。寛永三年九月九日の二条城後水尾天皇行幸能は秀忠が上洛しての大きな会で、『江戸初期能組控』に重複して載せられており、所望の分について「何も役付御意也」などとあるのだが、観世三十郎の〈翁〉で、権之丞が〈三番三〉、仁右衛門が〈さうけつのふりう〉を勤めている。

芸位ではなく、鷺流が観世座付であったための家格によると見るべきかも知れないが、仁右衛門の方が重い扱いを受けていたようである。仁右衛門をあまり悪くは言えない分、伝右衛門を悪く言ったかのように思われる。ただし、伝右衛門とも回数は少なくはあるが共演していることは言うまでもない。

3　上演曲

Hosei University Repository

虎明はどんな狂言を演じたのか。江戸城等での上演曲は演者の選曲によるものではなく、回数が多いからといって得意曲ということにはならないが、その芸風をうかがうことができようか。

重複を除けば上演は七六二回。そのうち狂言は五〇六回一一一曲。このうちシテ・アドを含め一〇回以上の記録があるのは、

麻生　居杭　犬山伏　今参　夷毘沙門　薩摩守　三人片輪　二千石　宗論　墨塗　唐相撲　鶏聟　腹不立　楽阿弥

の一四曲である。池田氏「江戸初期の狂言界」に江戸前期の上演回数の多いものが順に一五曲まであげられているが、〈今参〉〈薩摩守〉〈二千石〉〈唐相撲〉〈鶏聟〉〈楽阿弥〉の六曲以外はそこにあげられたもので、この六曲も少なくもない。一般によく演じられたものを、虎明も多く演じているということにしかならないようである。

〈墨塗〉は前述のように四七段抄にも触れられ、人気曲であったようで、一四回演じているのだが、一二回のアドの内、四回に「女」の注記がある。『古之御能組』の元和七年五月三日の江戸城三座能で、

墨塗　仁右衛門　女弥太郎
　　徳右衛門

などとあるのである。この場合は若かったからとも見られるが、〈墨塗〉の「女」の注記は他の役者に比して多いようで、やや線の細い役者と見られていたかと想像してみたくなる。

重い曲についてはどうだろうか。弥右衛門(虎明)・八右衛門(清虎)・長大夫が連署して提出した、いわゆる『寛文初年演能曲目書上』(能楽研究所蔵『御能組并狂言組』等。以下「寛文書上」とする)で「習ニ仕候分」とするのは、〈釣狐〉〈楽阿弥〉〈花子〉〈通円〉〈今参〉〈武悪〉の六曲である。このうち〈通円〉は記録がない。〈楽阿弥〉〈今参〉の上演回数が多いのはいま述べたが、〈楽阿弥〉の初シテは元和四年、二二歳と早いが、〈今参〉は前述の通り若い頃はアドばかりで、

Hosei University Repository

初シテは明暦元年（一六五五）、五九歳の時、〈武悪〉も前述の通り若い頃はアドばかりで、初シテは寛永一六年、四三歳の時で、重く扱われていたことがわかる。

現在も大蔵流で極重習とする〈釣狐〉〈花子〉は、八〇段や虎明本の記述態度から見て大曲意識があったものと考えられる。ところが上演回数は〈釣狐〉が三回のアドのみ（シテは三回とも虎清）、〈花子〉が明暦元年、五九歳の時の二回のみである。(注10) もちろんこれで記録のすべてではないのではあるが、同じような資料によって弟清虎の場合、〈釣狐〉が八回、〈花子〉が一四回見られるのに比して、いささか不審ではある。なお現在重習とする三曲のうち、〈庵梅〉は記録がなく、〈比丘貞〉は寛永一八年から三回、〈枕物狂〉は寛永一六年から四回のシテの記録がある。

4　虎明主催の狂言会

虎明主催とも言うべき狂言会が二つある。正保三年の祖父虎政（道春）の五〇年忌狂言尽と、明暦元年三月二一日から五日間行われた堺七堂浜での勧進狂言である。その選曲には自身の意向が働いたであろうし、出演する役者の人選にも意味があったろう。

『江戸初期能組控』によれば、道春五〇年忌狂言尽は三月一七日に行われた。同じ日に奈良でも「道林興行」の能会があり、同じ趣旨の会を病床にあった虎清に代って清虎が主催したものと考えられる。これは小山氏「伊達文庫「古之御能組」と江戸初期の能・狂言」にも言われる通り、弥右衛門家と八右衛門家が別々になっていたことを強く印象づける。上演されたのは、

すゑひろがり　こぶうり　すはじかみ　花子　口まね　ししやく　あさいな　ふせないきやう　いぐゐ　ちやつぼ　腹立す　ふくろう　三人かたは　山たち　さつまのかみ　太刀ばい　枕物狂　らくあみ　二千石

Hosei University Repository

の一八曲で、弥右衛門(虎明)は〈酢薑〉〈枕物狂〉〈二千石〉のシテを勤めている。〈枕物狂〉は後に重習とされるものであり、〈二千石〉は追悼にふさわしいという意識が既にあったのだろう。後継者弥太郎(栄虎)は一八歳、〈末広がり〉〈花子〉〈朝比奈〉のシテを勤めている。〈花子〉を演ずるのは早いが、期待の大きさを示すものか。

他にシテを勤めたのは、

馬之助　喜左衛門　喜太郎　作十郎　佐左衛門　重二郎　庄兵衛　甚兵衛　太兵衛　太郎八　長蔵　徳三郎

で、彼らが主だった弟子だったのだろう。喜左衛門は松井、妹の聟。喜太郎は大蔵、作十郎は大倉、佐左衛門は脇本、喜多座、甚兵衛は高安、金剛座、太兵衛は長命である(長蔵については後述)。

堺七堂浜での勧進狂言は、虎明一世一代のイベントであり、『わらんべ草』四五段抄に「わが代に、さかいの、七堂がはまにて、勧進狂言仕初候ひし也、その次第、万事別紙に記す」とある「別紙」が『明暦堺七堂狂言芝居』(『日本庶民文化史料集成』四、に小山弘志氏により翻刻)である。(注11)五日間毎日〈三番三〉と狂言風流の後、狂言一五曲を上演した、大がかりなものであった。堺での興行は「和泉の堺政所石河土佐守殿、別而予に御念比におほしめされ候ゆへ」とあり、勧進狂言の終った二日後には石河土佐守役宅の座敷で狂言九曲を演じている。勧進能の場合は当時は四日間がふつうであったが、虎明も出演した寛永六年の北七大夫の勧進能が五日間であったのに倣ったと四五段抄にある。そして一日の曲数については一三曲の予定だったのが、「土佐守殿・清岩和尚様、それにてハミちかく候ハんとおゝせられ、十五番に仕候」とある。

堺奉行の歴代は『摂陽奇観』(浪速叢書)等で知られるが、当時の奉行は石河(いしこ)土佐守利正である。利正は『寛政重修諸家譜』(表記は利政)によれば、二七〇〇石取りの旗本、勝政の子で、承応元年に父の跡を継いで堺奉行となっていた。清岩はふつう清巌と表記、大徳寺一七〇世の禅僧で、慶安二年には沢庵の後を受けて品川東海寺住持となったが、

Hosei University Repository

この頃は大徳寺末の堺の南宗寺にいた。この二人は六段(段数欠)抄の頭書に萩原兼従からもらった細川三齋作の竹の花入れを見せた相手として見える。石河利政は『全堺詳志』(浪速叢書)に俳諧の連句に出座したことが記され、清巌は書画にすぐれまた茶を嗜んだことが知られ、芸能への関心をうかがわせるが、虎明との接点については残念ながらそれ以上は不明である。

三日目に天祐和尚が一日見物したとある。「家之系図」に虎清に道倫の道号を付けたとあるが、大徳寺一六九世の天祐紹果であろう。また二九日の石河土佐守役宅では「御家中衆清岩和尚様南宗寺之僧達」の他「今井彦右衛門殿」が見物したとあるが、今井宗久の曾孫で、『寛永重修諸家譜』によれば、祖父宗薫以来旗本となり、堺に住み近辺の御料地の代官を勤めた今井家の当主兼続である。虎明の人脈をうかがわせる。

虎明は毎日二、三曲のシテを勤めるが、注目されるのは〈花子〉で、四日目と土佐守邸狂言尽しの二回演じている。先に記録に二回あるとしたのは、この時だったのであり、この時だけだった。弥太郎も〈三番三〉を含め、毎日二、三曲に出ているが、〈通円〉を四日目と土佐守邸狂言尽しで、〈釣狐〉を五日目と土佐守邸狂言尽しで両日ともキリに演じている。土佐守邸狂言尽しの狂言に勧進狂言の曲目と重複するものが多いのは、アンコール上演のような所望によるものだったのであろう。

出演者については「役者人数之覚」に全部の名前を載せ「卅九人」とあるが、江戸での道春五〇年忌に出ていた中では長命太兵衛・高安甚兵衛がいる。八右衛門は三日目までだが出ており、奈良での道春五〇年忌に出ていた、つまり八右衛門家側であったかと考えられる大蔵金右衛門・長命弥次兵衛なども出ている。京衆の他、膳所・大津・伊予(原「伊与」)・大坂・おんぢの各地から来たとあって、大蔵流をあげての興行であった。「おんぢ」は現八尾市恩地、高安座の拠点で、高安甚兵衛がいた。そしてもう一つ注目されるのは、〈翁〉の大夫祢宜弾正の他、囃子や地謡に「祢

Hosei University Repository

宜衆」、狂言の地謡に「祢宜弟子衆」が出ていることである。この勧進狂言には南都禰宜衆の協力が大きかったのである。

5　三番三・風流・間狂言

狂言役者が舞台上で能役者と接するのは〈翁〉と能の間狂言である。大蔵家は金春座付であり、〈千歳〉は上掛りでは勤めないので当然だとしても、金春座の〈翁〉で〈三番三〉を舞うことが多く、アイを勤めることも多いが、他座にも出ており、特に金春座に限るということは認められない。宝生座とつきあった記録はなく、寛永八年の宝生九郎重友浅草勧進能にも鷺流の役者しか出ていないが、宝生以外の他座とは万遍なくつきあっているとしていいだろう。

虎明が最も尊敬した能役者として米倉氏「わらんべ草の著者大蔵虎明考」は金春八郎禅曲をあげる。ただ直接教えを受けたことはあまりなかったろうとされたが、確かに禅曲の〈翁〉に出た記録はなく、アイは元和四年の江戸城四座立合能など何回か勤めている。ただし後継の七郎宗竹とは意見が合わなかったとされるが、もちろん舞台でのつきあいは多い。そしてその代りに後に喜多七大夫に接近していくとされるのだが、それはその通りで、七大夫の勧進能に出演するなど、記録によっても確かめられる。

そして前述の通り、母方の祖父であった幸月軒にも親しく教えを受けていた。そうした環境で得た秘伝を書き留めるのが虎明の本領で、まず成ったのが「聞書」と「笛集」らしく、この二書をまとめたのが現存する『聞書并笛集付唱歌』である。年記も署名もないが、若い頃のものとしていいだろう。「聞書」は能・狂言・太鼓等の雑多な秘伝を書き留めたものである。「笛集」は笛伝書・笛手付で、竹本幹夫氏「室町後期・江戸初期の伝書とその特質」(『岩波講座能・狂言Ⅱ能楽の伝書と芸論』昭和63)によれば「一部似斎系かと思われる説を含むが(中略)新旧とり合せた江戸時

Hosei University Repository

代一噌流系の伝書」とのことである。こうした伝書として他に『真伝集』がある。上巻は能の装束付等で、寛永一九年の年記がある。下巻は「当流音曲五音之次第」や弘治二年(一五五六)の大蔵二介虎家の「懐中抄」「花伝集抜書」の写しなどである。米倉氏『わらんべ草(狂言古語抄)研究』の「わらんべ草の典據」では当時知られていた『聞書并笛集付唱歌』が『わらんべ草』の典拠となったことを明らかにされたが、前述のものも含め、これらの著作すべてが後に『わらんべ草』に結実していくのであろう。

〈千歳〉は一四回、〈三番三〉は四八回ある。〈三番三〉は『近代四座役者目録』に「殊ニ、サンバサ舞事、ヒタ、レアツカイ已下、見事也」と言われた虎清ほどの回数ではないが、鷺仁右衛門(宗慶)などよりも多く、大蔵流宗家という立場によるだけではなく、得意とし認められていたのであろう。

狂言風流は前述の通り鷺流による上演が多く、虎明の記録はない。虎明周辺でも、虎清シテの〈鶴亀の風流〉〈餅の風流〉(いずれも虎明は〈三番三〉)、清虎シテの〈松竹の風流〉、そして堺七堂浜勧進狂言で五日目まで毎日演じられたのが見えるだけである。もちろん伝承はされていた。寛永一二年に山脇和泉(元宜)・山脇五郎左衛門(元永)より「風流五番」の相伝を受けたらしく、その際の「神文」が山脇和泉家の『狂言由緒略書』に載せられている。(注12) なお『風流之本』で〈松竹〉〈延命地蔵〉〈八幡〉〈春日〉〈弁才天〉の五曲に「虎明作也」の注記があるのだが、この五曲が前述の『真伝集』の下巻巻尾に既に記載されている。

六段(段数欠)抄に風流を作るのに道春と「談合」せよと命じられて「人に談合仕たる事なし」と答えたとあり、進藤久右衛門が開口を頼んだ例があったのでそんなことを言われたのだとするが、道春は林羅山で、それは先にも触れた寛永三年の二条城後水尾天皇行幸能の際のことであろう。『古之御能組』に久右衛門が「わすれしはらくうめき」などとある。『隣忠見聞集』(能楽史料)も「脇方の事」で「山科」のこととするがこの件に触れ、秀忠が羅山に「随

Hosei University Repository

分目出度き文を長く祝し作れ」と命じたのが悪かったとして咎めはなかったとある。なおその開口の詞章は『行幸・仙洞・日光御能組』に「道春作」として載せられている。

間狂言の記録は少ない。むしろ『江戸初期能組控』や『古之御能組』がアイの役者名まで書き留める珍しい資料だったおかげで少し把握できると言うべきところであろう。後に重い扱いとされるものでは〈石橋〉については前述の通り、〈道成寺〉は一三回で、若い頃から勤めている。『わらんべ草』の「自讃」に、三五歳の時、松井喜左衛門の所望で〈江島〉〈浦島〉の台本を作ったところ、後で見た「宇治の弥太郎自筆の本」と同じだったとあるが、両曲とも上演の記録はない。注目されるのは替アイで、〈嵐山〉の〈猿聟〉、〈賀茂〉の〈田植〉、〈白髭〉の〈道者〉、〈八島〉の〈那須〉、いずれもいま替アイとされるものがふつうに演じられていたことがわかる。

6　その他

その他、注目されることをあげておきたい。

『古之御能組』に、寛永二年九月一二日の江戸城本丸能に「弥太郎煩ニて出不申候」、一五日の江戸城西丸公家衆饗応能に「弥太郎煩よくなくいまた出不申候」の注記があるのだが、虎清についてもそれぞれ「弥右衛門落馬仕出不申候」「弥右衛門落馬いまたよくなく出不申候」とある。虎明の「煩」と虎清の落馬に関係があるのかどうかは不明である。二人とも次の記録は一一月二三日で、それまで出演しなかったらしい。

寛永一二年正月二八日の江戸城二の丸での伊達政宗の家光饗応の茶事能の際には〈盆山〉等を演じているが、『寛永雑記』に「右能過躍有陸奥守小姓衆」とあるのだが、政宗の臨終の際の記で生前の逸話をも記す『命期集』には、この躍りに能の囃子方も出、新発意の役は大蔵弥右衛門と鷺仁右衛門が勤めたとある。これは岡田紫男氏が「叢柏居漫

Hosei University Repository

筆(七)」(『能楽』明治40・8)で紹介され、それによって小林責氏が「大蔵虎明の若衆躍り」(『白木狂言の会』73、昭和36・7)で取り上げられたが、近年、佐々木聖佳氏が「上覧踊りと「新発意」役―近世初期の狂言師の踊り―」(『奈良教育大学国文』27、平成16・3)で詳しく考察されている。佐々木氏はこの件を『玉露叢』『伊達治家記録』によって紹介され、他の資料をも引いて、新発意は「躍りの司会をして全体の指揮をとるという役割」を果たすもので、狂言役者が勤めることが多かったとされる。弥右衛門は虎明ではなく虎清だが(仁右衛門は宗玄)、虎明もその場にいただろう。能の後に躍りが演じられ、能役者たちが参加する、虎明の若い頃はそうした時代だったのである。なお二月四日には饗応済後宴能が催され能八番・狂言四番が演じられた後、『伊達治家記録』によれば「躍六踊」があったとのことである。同様の記録は『古之御能組』の寛永一四年・一六年の番組にも見えるが、それに狂言役者が加わったかどうかはわからない。

明暦元年七月二四日には、小幡勘兵衛を自宅に招いて狂言尽しをしている。小幡勘兵衛は甲州流兵学者で、虎明も「ゆるし共、取し覚」のうち「軍法」を習った人であるが[注13]、前述の政宗の茶事能で〈式三番〉や〈よね市〉を演じたとあるなど、逆に狂言の稽古をしていたことが知られる。この日は一六曲の狂言が演じられていて、虎明は〈今参〉のシテを勤めている。

江戸に移ってからは南都の神事能に出演することが少なくなり、元和八年の薪能(前述の清虎との共演)、寛永三年の若宮祭への出演が見られるだけなのだが、弥右衛門となった頃から再び見えるようになることも注意される。正保二年の薪能は前述のように弥右衛門としての初出なのだが、承応元年の若宮祭、二年の薪能、若宮祭、三年の薪能には連続して出ている。晩年の回帰意識をうかがわせる。承応三年の薪能初日の〈二千石〉には『古之御能組』に「殊外出来之由取さた申候」との注記がある。

Hosei University Repository

もう一つ注意しておきたいのは、鷺流との異流共演が少なくなる以上に、それ以外の役者との共演がなくなることである。小山氏「伊達文庫「古之御能組」と江戸初期の能・狂言」が指摘されているが、虎清の時代、慶長頃の記録には南都禰宜衆や京衆との共演がふつうにあり、虎明も若い頃は当然共演したのだろうが、後には前述の堺七堂浜勧進狂言を例外としてなくなっていく。この勧進狂言でも南都禰宜衆は立ち役には出ておらず、わずかに石河土佐守邸狂言尽しで一人がアドを三回勤めただけなのである。

なお喜多古能の『仮面譜』に面打をあげる中に「虎明（コメイ）一説トラアキラ」が「古作」の一人として見える（寛政九年刊本）が、大蔵虎明なのであろう。七七段で狂言面をあげる中に「一山桜　＼たぐひあらしのと云心にて名付、虎明作」とある「山桜武悪」の他、虎明が打った狂言面がいくつか現存することについては、中村保雄氏「壬生大念仏の面―特に猿と武悪の面について―」（『芸能史研究』18、昭和42・7）に詳しい。

三　晩年、死亡

虎明の上演記録はたまに欠ける年はあるものの明暦元年まで続くが、その後は江戸での記録は見られない。『わらんべ草』自序に「我猶むそぢにもあまり、ことさら、つね〳〵いたづがわしくて」とあり、また「道倫碑銘」に万治二年（一六五九）の秋に「京へ養生に登りし折ふし」、朝山意林庵に書いてもらったとあるところから見て、病気がちであったかと思われ、また本拠を奈良へ移したかとも考えられる。そしてその中で、伝書をまとめることに携わったらしい。それより以前慶安四年三月に『昔語』を著し（草稿本が現存）、それを数次にわたって改稿して一一月には喜多七大夫の奥書加判を得ていた（初稿本・再稿本と言われるものが現存）が、万治元年六月に朝山意林庵に序を請うた（この時定稿本と言うべきものがあったはずだが、それは現存しない）。そして二年八月にそれに抄を加えて『昔語抄』とし、[注14]

Hosei University Repository

さらに三年一二月に『わらんべ草』を完成させた。この成立過程については米倉氏『わらんべ草（狂言昔語抄）研究』に詳しいが、その後『日本庶民文化史料集成』四に小山弘志氏によって虎明自筆の『昔語乾坤』が翻刻された。乾巻は『昔語』に若干の注を付したもの、坤巻は「自讃」等で、後の『昔語抄』に引き継がれるものである。乾巻に慶安四年六月の奥書があるが、それ以後若干の年月を経て成ったものらしく、『昔語抄』との中間に位置するもののようである。

「ゆるし共、取し覚」のうち、神道については「吉田萩原兼従公」より印可を得たとある。『狂言始り』に「萩原兼従卿よりも神道御伝授に而御印可感状迄被下」とあるのと関係するのだが、狂言本の「萬集類」の巻尾に虎道（栄虎の前名）とともに正保二年五月に伝授された「狂言之大事」「申楽翁大事」が書き留められている。そしてまた「神道秘密翁大事」を著したらしい。この本については伊達家の能大夫桜井家に伝えられた転写本によって天野文雄氏が「狂言大蔵家の《翁》秘説」（『能―研究と評論』19、平成4・5。『翁猿楽研究』平成7、に収録）で明らかにされたが、それは『昔語抄』と『わらんべ草』の間であったとのことである。

古典のうち「徒然草印可」については『昔語抄』になく『わらんべ草』で加えられたのだが、「／槃齋　／喜齋／一花堂、伝授也」とある。一花堂については小高敏郎氏『近世初期文壇の研究』（昭和39）が一華堂切臨の事績を追う中で触れられ、伝授は明暦以前のことだろうとされ、『源氏物語』『伊勢物語』についても切臨の伝授かとされた。槃齋については齋藤彰氏「わらんべ草の徒然草古注受容」（『学苑』平成5・2、3）が『徒然草』受容史の観点から詳しく考察されており、加藤槃齋の印可はやはり『昔語抄』と『わらんべ草』の間のことであるという。

喜齋については従来不詳とされてきたが、三宅寄齋であろう[注15]。切臨の師、藤原惺窩と交遊のあった儒学者で、『徒然草』烏丸光広本の跋文にある「亡羊処士」その人である。別の箇所に「喜齋老」とあるが、虎明より一七歳年長で、慶安二年に没した。喜齋については古く文政一三年（一八三〇）刊『先哲叢談後編』、最近では上野洋三氏「三宅亡羊

Hosei University Repository

の『履歴』」（『雅俗』9、平成14・1）「三宅亡羊の遺書」（『文学』平成14・1、2）がある。「三宅亡羊の『履歴』」に翻刻された『履歴』は門人による年譜であるが、『徒然草』との関わりは岐阜中納言や後水尾院に講じたことしか記していない。江戸下向も二度記されているのだが、一三段抄に「江戸にて、京の喜齋、保田甚兵衛殿にて、つれ〴〵のかうしやく有し時」とあるのは、その江戸で寄齋が何をしていたのかを知らせる貴重な記録なのである。なお虎明は『徒然草』について「ひめおく事共まできゝし事、十三冊にして、私覚抄と名付」たというが、その本は現存しないようである。印可を得た一九箇条のうち宗教・古典関係の多くは晩年のものらしい。

『わらんべ草』が引く書籍類については、杉森美代子氏「版本刊行の面からみた「わらんべ草」成立過程の考察」（『東京学芸大学研究報告』13、昭和37・3。『狂言研究―考察と鑑賞』昭和44、に「江戸初期刊本による「わらんべ草」成立過程の考察」として収録）、米倉氏「わらんべ草の典據」に詳しいが、仮名草子の類など数多く、虎明の修学が晩年まで続いていたことがよくわかる。

万治三年にはこの他に、大蔵助左衛門に宛てて『大蔵虎明伝授目録』を与え、アシライ間の台本三冊[注16]を大蔵長吉に与え、また風流の台本をまとめている。舞台は少ないが、活発な修学・著述活動をしていたのである。

そして万治三年の薪能（『古之御能組』によるもので、『薪能番組』では栄虎）、翌寛文元年の春日若宮後日能が最後の記録となる。引退については「家之系図」に、

＼寛文元年、十一月、隠居被仰付、同十九日、法体也

の書き込みがあるが、『柳営日次記』（内閣文庫マイクロフィルム版）の十一月三日に、

一 地方百石　金春座狂言
　 配当米九十石　大蔵弥右衛門

Hosei University Repository

（十五人扶持
右弥右衛門病気故実子弥太良へ被下
弥太良以来五人扶持ハ上ル

とあって、確認することができる。[注17] また虎明の俸禄が虎清のものをそのまま引き継いだものであったことも確認できる。

そして『由緒書』に、

寛文二寅年正月十三日南都に而病死仕候

とあり、『近代四座役者目録』にも「寛文二壬寅正月ニ果ル」とある。遅くとも前年の春日若宮祭からは奈良に居続けたのであろう。なお笹野氏が「解説」に引く茂山正虎写「関東師家景図写」には「寿六十六」とあるとのことである。法名は『狂言始り』等に「道徹」とある。奈良の蓮長寺に葬られ、墓はいまもある。

虎明の子どものうち熊蔵・栄虎については前述したが、「大蔵家系図」によれば、その他に、男子に長蔵、平吉、長吉、女子にキイ、早世した子、センがおり、長蔵は「母同」即ち金剛右京妹、平吉は「江戸腹」とある。長蔵は先の道春五〇年忌にも出ていたが、後に長大夫家を興す。この人については拙稿「大蔵長大夫家考」（『能楽研究』27、平成15・3）で考察した。平吉については「後針術を業として嶋岡東伯と云」とある。長吉については「後城州北イナヤツマと云所へ養子ニ行、嶋岡庄助と云、後年素伯と改」とある。「イナヤツマ」は稲八間、現相楽郡精華町である。この人は前述のようにアシライ間の台本を与えられており、また万治四年までの上演記録があり、長蔵の兄に当るのではないかと「大蔵長大夫家考」で考えた。平吉も長吉も嶋岡姓となったというが、虎清の弟で弥惣右衛門家を興した嶋岡順正と関係があるのだろう。

Hosei University Repository

虎明の跡を継いだのは栄虎、分家としてそれを支えたのが長大夫ということになる。なおキイは大蔵弥惣右衛門の妻となっている。この弥惣右衛門は二代虎吉であろう。

四　所演曲と大蔵虎明本

さて虎明の所演曲については、先に回数の多いものと重く扱われるものについて見たが、考えておきたいのは所演曲と大蔵虎明本所収曲との関係である。虎明本には「万集類」の六曲を含め二三七曲の台本を収める。これについて私は「独狂言をめぐって」（『能―研究と評論』7、昭和52・8。『狂言の形成と展開』平成8、に収録）で、〈どちはぐれ〉や〈寝声〉を狂言記系の狂言をとったものとして「虎明本も保教本と同じく他流派の狂言を収めているらし」いとしたことがあり、「狂言と唯識―〈杭か人か〉の形成と展開」（『能と狂言』1）でも、〈杭か人か〉は同様に狂言記系の狂言であったかとしたが、全面的な検討はしていない。虎明本にあってその後の大蔵流で演じられないものについては、私自身相変わらず「虎明本の後中絶」といった言い方をしてきたのだが、はたしてそうなのか。

そこで所演曲と所収曲を対照させるべく【別表2】を作成した[注18]。所演曲については参考のため父虎清・弟清虎の分も示すこととする。虎明の場合とほぼ同じ資料を用いて収集しえた、虎清は一一三〇回（狂言八一〇回一二五曲）、清虎は五四〇回（狂言三七六回一〇六曲）の記録によったものである。これらで総計二四〇〇回を超える記録を把握することができる。ただし人ごとに回数を数えているので、この三人で演じた場合は三回ということになるのだが、そうした例は少なく、ほぼ江戸前期の上演の状況を示すものとしていいだろう。また虎清本所収曲（八曲）、「寛文書上」所載曲（一六〇曲）をも参考のため載せた。

虎清・虎明・清虎の父子三人による上演記録のある狂言は一五五曲にのぼるが、このうち曲名不明の〈座頭〉〈相撲

Hosei University Repository

〈大名〉〈すり〉〈盗人〉〈御年貢〉〈聟入り〉〈山立〉の七曲を除くと、虎明本に収められていないのは、ただ一曲、〈業平餅〉だけである。慶長一〇年五月四日、徳川秀忠将軍宣下祝賀能二日目に『将軍宣下御能目録』によれば巻法長兵衛のシテに行碁五郎兵衛とともに大蔵弥右衛門虎清が出ている（ただし『文禄慶長年間御能組』『古之御能組』は、けんぼ（ば）う・行ギのみで虎清の名はない）。〈業平餅〉については永井猛氏「狂言〈業平餅〉をめぐって―狂言から歌舞伎へ―」（『説話と伝承と略縁起』平成8。『狂言変遷考』平成14、に収録）に詳しいが、群小流派の伝える狂言だったとされている。巻法らにつきあったものと見ていいだろう。

「寛文書上」の一六〇曲はすべて虎明本にあるので、書上にない七七曲がまず大蔵流非所演曲であったかと疑えるのだが、残る上演曲一四七曲のうち、「寛文書上」にあるものは一三八曲、ないものは九曲で、この推測を裏付けてくれる。「寛文書上」にあって上演記録のないものは、〈千鳥〉〈縄綯〉などで、二二曲になる。記録の偏りを考慮すべきかも知れないが、江戸前期にはあまり演じられなかったと見るべきであろう。

七七曲のうち、上演記録もない六八曲は非所演曲であった可能性が高いと見ていいだろう。先にあげた〈杭か人か〉〈どちはぐれ〉〈寝声〉や「万集類」の六曲などが含まれる。〈三国の百姓〉〈三人の長者〉のように、和歌や謡しか記されていないもの、〈懐中聟〉〈口真似聟〉のように粗筋しか記されていないものが含まれるのは当然であろう。〈河上〉など、虎明本には別演出の注記まであるのだが、虎明の見聞を記したと見るべきなのであろう。いささか不思議なのは〈釣針〉〈仁王〉など、きちんとした台本が記されているものもあることだが、これらはこの後も江戸時代を通じて大蔵流で上演された形跡はないのである。もっと不思議なのは〈鈍根草〉〈泣尼〉〈文荷〉の三曲が虎清本[注19]にもあることである（〈岩橋〉も和歌だけだが記される）。これらは非所演曲とまでは言えず、遠い曲であったと言うべきかも知れない（ただしこれらも江戸時代における弥右衛門家歴代による上演記録を見たことがない）。

Hosei University Repository

七七曲のうち上演記録のある九曲は所演曲であったのだろうか。〈猿聟〉〈薬水〉はそれぞれ能〈嵐山〉〈養老〉の替アイで、虎明本で本狂言として収めているだけなので、これは演じられていたとしていいだろう。[注20] 残るのは〈石神〉〈御前座頭〉〈二九十八〉〈花盗人〉〈松楪〉〈無縁聟〉〈若菜〉の七曲である。

〈石神〉は、虎清が長命徳右衛門シテのアドを1回、虎清・虎明が鷺権之丞シテのアド1回を勤めたのみで、つきあっただけだろう。〈御前座頭〉は虎清の1回のみで、記録によってシテ・アドの二通りがあり、これもあやしい。〈無縁聟〉は虎清シテ、虎明・仁右衛門他アドの1回のみなのだが、虎明本では曲名は〈樽聟〉で、しかも曲名の由来となった肝心の「無縁」という語が使われておらず、台本そのものがあやしい。[注21]

〈花盗人〉は虎明シテ、虎清・清虎アドの1回のみ。〈松楪〉は清虎シテの1回で、これは小舞であったのかも知れないが、演じていたことにはなる。他に小舞がもう1回ある。これらは「享保九年書上」で「珍敷狂言」とされ、虎寛本にも同様の扱いで台本が載せられており、所演曲であっておかしくはない。なお他に「珍敷狂言」とされた〈さいほう〉〈樋の酒〉〈饅頭〉は演じられていないが、〈饅頭〉を除いて江戸後期の記録がある（前述の記録のない六八曲のうち、弥右衛門家歴代による江戸後期の記録が確認できるのは、この二曲と「嘉永二年書上」で所演曲に加える〈重喜〉のみである）。〈二九十八〉は虎明のシテ1回のみ、〈若菜〉は虎清がシテを2回、アドを1回、清虎は虎清シテのアド1回のみなのだが、これらは虎明本を見ても、演出注記もあり、演じられていた可能性が高い。

結局、虎明本二三七曲のうち、七一曲は非所演曲、少なくとも非常に遠い曲であったということになる。

付　著作・文書

虎明の遺した著作や文書については、生涯を追う中で位置づけたが、改めて現存するものを一覧し、奥書を摘記し

Hosei University Repository

（返り点・送り仮名を付すものがあるが省略する）、判・花押の形がわかるものについては注記し、また翻刻・複製本をあげておこう。

1　聞書并笛集付唱歌

1冊。『大蔵家伝之古本能狂言』五、他。

2　御ゆい物に被下候はんと被仰御書おき被成候一つ書之事

1枚。「寛永拾壱年甲戌五月廿八日　大蔵弥太郎虎時(注22)（花押A）／大蔵弥右衛門様／同八右衛門殿まいる」。『日本庶民文化史料集成』四。

3　神文之事

1枚。「狂言太夫大倉弥太郎虎時（花押A）(注23)／寛永拾二年中夏吉辰日／山脇和泉殿／同五郎左衛門殿」。『狂言辞典資料編』所収「狂言由緒略書」。

4　間狂言本

4冊。「蓋夫踏舞之為曲也（略）惟時寛永拾二乙亥歳末冬大呂（惟時寛永拾三丙子歳初春太簇・于時寛永拾三丙子歳中春夾鍾）吉宿於武州江府之金城下拝書（略）于時三十九歳（于時四十歳・惟時四十歳）法名心叟道徹居士　弥太郎虎時（丸印）（角印）」。正保二年正月吉日、虎清奥書加判。『大蔵家伝之古本能狂言』四・五、他。

5　衣裳付の本

1冊。「（方印）右此衣裳付之本於我等家ニ口伝ニ申渡候儀ニ候へ共書付申者也／大蔵弥太郎虎時（丸印）（角印）（花押B）。『古典籍下見展観大入札会目録』（平成9・11）に半丁二葉の写真。同目録では書名を「出立之本」とする。

Hosei University Repository

6　代伝抄

1冊。「(方印)右之書物代々習不残弥右衛門ニ受相伝其習書付狂言之心持我等分別ニ而此書物仕出シ候へ共以私之儀非様之知古求新ヲ自其理ニ此書ヲ云(書)出者也少も他見有間敷候仍如件／大蔵弥太郎虎時(丸印)(角印)(花押B)[注24]」。『芸能の科学』28、平成12・3、に羽田昶・高桑いづみ氏により翻刻。

7　間・拍子舞

1冊。「右間之本代々相伝之内委細清濁仕書付申者也／大蔵弥太郎虎時(丸印)(角印)(花押B)」。『芸能の科学』29、平成14・3、に小田幸子氏により翻刻。

7　式三番

1冊。「大倉弥太郎虎明(丸印)(角印)[注25]」。『芸能の科学』30、平成15・3、に高桑氏により翻刻。

8　狂言本

8冊。「(方印)夫使道明干一時也(略)惟時寛永十九壬午菊月良辰日於武州江府之金城下拝書／(方印)大倉氏虎明(丸印)(花押C)」。正保二年正月吉日、虎清奥書加判。『大蔵家伝之留』古本能狂言』一・二・三、他。

9　真伝集(内題　実伝集)

2巻。「干時寛永拾九壬午霜月吉日」(上巻)。『大蔵家伝之留』古本能狂言』五。

10　狂言大蔵系図

1帖。「右吾等家之系図若此候間後世江可致相伝者也／正保二乙酉林鐘吉辰／仙渓道倫　虎清(花押)／(丸印(虎清の印))／大倉弥右衛門虎明(花押C)」。

11　昔語

Hosei University Repository

a　草稿本

1冊。「右此書は下書なるゆへ前後不同有清書と見合すべし落字数多可有可勘也／慶安四年弥生吉辰日於武州書之／大倉弥右衛門虎明（花押）／大蔵長太夫まいる」。

b　初稿本

1冊。「於武州江府書之干時五十五歳／慶安二二暦辛卯沽洗吉辰日／従元祖十三代狂言大夫藤原氏大倉弥右衛門／虎（花押D）」。一一月、北七大夫長能奥書加判（鴻山文庫本）。『わらんべ草（狂言語抄）研究』に京大本・松平文庫本を翻刻。

c　再稿本

1冊。「於武州江府金城下書之干時／慶安四暦辛卯林鐘吉辰日／従元祖十三代狂言太夫藤氏／大倉弥右衛門虎明」。一一月、北七太夫長能奥書加判。

d　乾坤本

1冊。「於武州江府（金城下ニ）書之　干時五十五歳／慶安二二暦辛卯林鐘吉辰日／従元祖十三代狂言大夫藤氏／大倉弥右衛門虎明」（乾巻）。一一月、北七太夫長能奥書加判。『日本庶民文化史料集成』四に翻刻。

12　明暦堺七堂狂言芝居

1冊。『日本庶民文化史料集成』四に小山弘志氏により翻刻。

13　昔語抄

a　岡康文書写本

4冊。「於京都追而勘書之／六十三歳／大倉弥右衛門虎（花押）／万治二年亥九月吉日」（鴻山文庫本）。

b　秘蜜録

Hosei University Repository

5冊。「於京都追而勘書之／六十三歳／大倉弥右衛門(判)(花押)／万治二年亥九月吉日」。『わらんべ草(狂言語抄)研究』に広島大学蔵本を翻刻。

14 伝授目録

1巻。「右之大事習共金春四良次郎殿ヨリ代々伝授也後世予カ家次之一子ニ為談合其方へ不残令伝授者也／従元祖十三代狂言太夫大倉弥右衛門尉虎明(花押E)／万治三年庚子正月吉祥日／大倉助左衛門殿参」。『芸能の科学』30、に小田氏により翻刻。

15 わらんべ草

5冊。「／此一冊、昔語と名付しは、／よしあしも、昔の人の詞のみ、書つゞけたる物がたりなり、(略)狂言太夫大蔵弥右衛門虎明(花押F)／万治三年極月吉辰日／右之五冊ハ狂言家継之一人へ可相渡者也」。『大蔵家伝之書古本能狂言』六、他。

16 風流之本

a 大本

1冊。「右風流三拾番雖古来之本有前後相違依有之致清書者也／(方印)狂言太夫大蔵弥右衛門虎明(丸印)(花押F)／万治三年庚子極月吉日」。『大蔵家伝之書古本能狂言』三、他。

b 抜書本

1冊。「右十八番之風流古本之内書抜候者也／万治三年極月吉日／大蔵弥右衛門虎明(花押F)」。『かがみ』23・24、昭和57・3、に島津忠夫氏により紹介(『能と連歌』平成2、『島津忠夫著作集』第十一巻、平成19、に収録)。

17 間の一本

Hosei University Repository

2冊。「右間之本三冊者依為童子略家之間与彼者也／(方印)狂言太夫大蔵弥右衛門虎明(丸印)(花押F)／万治三年極月吉辰日／大蔵長吉」。

印影は、丸印は不明、角印は偏は「王」中に「日」旁は「巾」だが読みは不明、方印は「南五大力菩薩」とある。花押は次の六種が使われている。

A（2）

B（7）

C（8）

D（11 b）

E（14）

F（15）

A～Dは江戸時代の武士に一般的な天地二線の明朝体である。

なおこの他に前述のように、『私覚抄』一三冊、『神道秘密翁大事』があった。また『猿楽聞書』巻八に「大蔵道徹(歟)の著したる伝書に「家号九万伝」といふものあるよし」とあるが、不明である。

注

（1）能楽研究所蔵笹野堅氏旧蔵資料中に「大蔵虎明年譜」の稿(大判原稿用紙三枚)があり、参考にさせていただいた。

（2）本文引用は大蔵弥太郎氏編『大蔵流伝之評古本能狂言』(昭和51)による。傍線は原本では朱引である。以下、段数のみを記すのは同書である。

（3）宮本圭造氏の御教示による。氏によれば、表紙が欠けており、初丁に「慶長八壬卯正月吉日」と書き込みがあり、暦

Hosei University Repository

日からも慶長八年の日記と考えられるとのことである。

(4) 『薪能番組』の寛永五年の二日目南大門能に「狂言　弥右衛門・同子」があり、「南都両神事能索引」は弥右衛門子を「大倉弥太郎弟」か大倉八右衛門1か不明」とするが、すべて同一人で、清虎であろう。

(5) 宮本圭造氏「南都禰宜衆の演能活動」(『芸能史研究』38～40、平成9・7～10・1。『上方能楽史の研究』平成17、に収録)所引。

(6) 能楽研究所蔵笹野堅氏旧蔵資料中に各種資料を翻字された『雑録』があり、その中に茂山正虎が書写したという「奈良住居御能役者旧地誌」が翻字されており、寛文一〇年なので栄虎のことだが、「坊屋しき町」とある。一部大学構内になったが奈良女子大学の南側に現在もある町名である。なお小林責氏『狂言史研究』(昭和49)の「大蔵流宗家の廃絶」によれば、大蔵流宗家二二代とされる虎年が慶応四年(一八六八)に奈良へ帰った時、坊屋敷町付近に住んだとのことで、家がずっとあったものらしい。

(7) 福阿弥については小山氏「伊達文庫「古之御能組」と江戸初期の能・狂言」に触れられ、大名の側近に、芸の稽古をしていて玄人の役者の補助をした者たちがいたとされる。

(8) 記事が相違することがあるので、重複したものもすべてあげる。なお大勢物で立衆に出ただろうと判断されるものもあるが、名前が明記されるもの以外はあげない。

(9) 宮本圭造氏「江戸期の日吉大夫」(『待兼山論叢(美学篇)』32、平成10・12。『上方能楽史の研究』に「丹波猿楽の近世」として収録)所引。なお宮本氏によれば、同日記の寛永一二年四月四日条に「昼今春弥大郎所へ大僧正御光臨」とあるとのことである。

(10) 現在は他に〈狸腹鼓〉を極重習とするが、伝来の古いものながら大蔵流で演ずるようになったのは新しく、当然虎明は演じていない。

Hosei University Repository

(11)　この興行については池田英悟氏「延宝二年の大坂勧進狂言―番組と出演者をめぐって―」(『能楽資料センター紀要』14、平成15・3)に延宝二年の栄虎の勧進狂言と対比させた考察がある。

(12)　注(6)の笹野氏の『雑録』にこの神文が写されている。

(13)　印可を受けたという武道のうち、この軍法は武芸の類よりも遅れることが米倉氏「わらんべ草の著者大蔵虎明考」に指摘されている。

(14)　石塚道子氏「「昔語抄」(万治二年本)をめぐって」(『芸能史研究』65、昭和54・4)によれば、『昔語抄』には、天明二年(一七八二)岡康文書写本と「秘密録」という書名を持つものとの二系統がある。岡康文はワキ方高安流の岡次郎右衛門家の一二代で、その写本は岡家に現存するとのことである。

(15)　宮本圭造氏「六麓会例会報告《99》」(『観世』平成17・10)によれば、六麓会平成一七年八月例会の「『わらんべ草』輪読」において、中尾薫氏が同様の説を提示されたとのことである。

(16)　笹野堅氏「古本能狂言・間につきての研究―大蔵流本―(一)」(『国文学研究』8、昭和12・6)で「大蔵虎明間之一本」とされたもの。現存二冊。

(17)　所領は『由緒書』には「百弐石」とあった。「元禄十一年能役分限帳之控」(『国文学研究資料館紀要』19、平成5・3、に樹下文隆氏により影印)の大蔵弥太郎(栄虎の子、縁虎)の項にも「地方百弐石」とある。ただし能楽研究所般若窟文庫蔵「金春座中石高控」(寛文七年のものとされる)には「知行百石有」とある。

(18)　アドしか勤めていないものには「アド」、小舞を演じたものには「舞」と注記する。異曲名にも○があるものがあるが、どちらの曲名でもあるということである。

(19)　奥書は虎清の没する二ヶ月前の正保三年五月で、虎明本より遅れるのだが、虎清自筆の一番綴本を合綴したもので、書写は古い。法政大学能楽研究所編『鴻山文庫能楽資料解題下』(近刊)参照。

Hosei University Repository

(20) ただし〈薬水〉は虎清が清虎らとともに狂言として演じた1回のみ。大蔵流では〈養老〉の替アイとしても演じた形跡がない。ただし、虎清本に台本があり、また堺七堂浜勧進狂言で上演されており(シテは伊予より来た光月清十郎)、八右衛門家では「天保八年書上」などにあげている。

(21) 拙稿「聟入り物狂言の諸相」(『文学』平成18・11、12)参照。

(22) 『日本庶民文化史料集成』四の翻刻では「虎明」とある。まぎらわしい字体だが「虎時」である。

(23) 花押については注(12)の笹野氏の写しによる。

(24) 奥書について高桑いづみ氏の御教示を得た。

(25) 注(24)に同じ。

(26) 西村聡氏の御教示による。備考の『御成留帳』も加能越文庫蔵。これも西村氏の御教示による。

(付記) 本稿は平成一七～二〇年度日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究B(1))による研究「地方諸藩の能楽資料に基づく都市と能楽の総合的研究」の成果の一部である。

Hosei University Repository

【別表１】大蔵虎明上演記録一覧

凡例的なことども

年　西暦で示す。
月　閏月には「ウ」を付す。
日　不明の場合は「＊」とする。
名前　「弥太良」は「弥太郎」とする。
演目　能には「能」、小舞には「舞」を付す。
役名　三番三は不記。
他　役がシテの場合は、アドの役者名を記す。
　役がアドの場合は、シテ・他のアドの役者名を記す。
　三番三の場合は翁の役者名を記す。
　役がアイの場合は、能のシテの役者名を記す。
　替間は狂言として扱う。
備考　催しの場所・趣旨等、その他の注を記す。
資料（略号一覧）

薪	薪能番組（『日本庶民文化史料集成』三）
薪旧	薪芸能旧記（片岡美智蔵）
春日	春日社家日記（本文参照）
天慶元	天正慶長元和年間御能組（観世文庫）
古	古之御能組（宮城県図書館伊達文庫蔵）
控	江戸初期能組控（能研般若窟文庫蔵）
城	御城諸家御能組（観世文庫蔵）
尾張御成	将軍家御成能記録（大倉三忠蔵）
宣	将軍宣下能目録（能研観世新九郎家文庫蔵）
行幸仙洞	行幸・仙洞・日光御能組（観世文庫蔵）
若宮	春日若宮祭礼能番組（『能楽研究』16）
寛永	寛永雑記（能研蔵フィルム）
加賀御成	将軍様相国様御成之次第（金沢市立玉川図書館近世史料館加越能文庫蔵）(26)
前期	江戸前期能組（大倉源次郎蔵。宮本圭造『上方能楽史の研究』による）
雲上	雲上散楽会宴（観世文庫蔵）
日光	日光御社参御祝儀御能番組（観世文庫蔵）
明暦	明暦堺七堂狂言芝居（山本東次郎家蔵）

Hosei University Repository

年	月	日	名前	演目	役名	他	備考	資料
1601	2	8	弥太郎	きやうけん	アド	甚六・甚六舎弟	薪能二日目南大門能	薪
1601	2	11	弥太郎	相撲狂言	シテ	鷺	薪能四日目南大門能、薪は大明狂言・弥右衛門	薪旧
1601	2	14	弥太郎	能安宅	アイ太刀持	今春大夫	薪能六日目南大門能	薪
1602	2	10	弥太郎	狂言	シテ	弥七・甚六・同舎弟	薪能二日目南大門能	薪
1602	2	14	弥太郎	狂言	アド	甚六・鷺	薪能四日目南大門能	薪
1603	2	11	弥太郎	柿山伏	アド	甚六	薪能六日目南大門能	薪旧
1603	2	12	弥太郎	不腹立	アド	甚六・鷺	薪能七日目南大門能	薪旧
1603	11	27	弥衛門子	地蔵舞	シテ		春日若宮祭礼後日能	春日
1605	5	4	弥太郎	三番三		金春	秀忠将軍宣下祝賀能二日目、古・宣は弥右衛門	天慶元
1605	7	8	弥太郎	三番三		観世	伏見城西丸観世能後日、古は弥右衛門	天慶元
1605	8	19	弥太郎	庭鳥むこ	シテ	弥右衛門	盤国神社八月例祭能、原弥三郎	古1
1605	10	4	くま	庭鳥むこ	シテ	弥右衛門	大坂城北政所饗応能	古1
1606	8	3	弥太郎	三番三		金春大夫	二条城公家衆等饗応能後日、古は弥右衛門	天慶元
1606	8	8	弥太郎	三番三		金春大夫	女院御所観世金春能後日、古は弥右衛門	天慶元
1608	2	13	弥太郎	昆布売	アド	弥右衛門	薪能六日目南大門能	古2
1613	2	16	弥太郎	三番三		新五郎	駿府藤堂和泉守高虎邸能	控
1613	2	16	弥太郎	能高砂	アイ	新五郎	同上	控
1613	2	16	弥太	さつまのかみ	アド	弥右衛門・善四郎	同上	控
1613	2	16	弥太	老武者	アド	仁右衛門・徳右衛門他	同上	控
1613	3	5	弥太	能ぬえ	アイ	徳川頼宣	駿府城三の丸慰み能	控
1613	3	5	弥太	はらたてず	アド	弥右衛門・徳右衛門	同上	控
1613	3	11	弥太郎	三番三		観世大夫	駿府城三の丸慰み能	控
1613	3	11	弥太	能右近	アイ	観世大夫	同上	控
1613	3	11	弥太	おんぎよくむこ	アド	弥右衛門・徳右衛門他	同上	控
1613	3	11	弥太	ほねかわ	アド	弥右衛門・行ギ他	同上	控
1613	3	11	弥太	くらま参	アド	弥右衛門	同上	控
1613	3	29	弥太	今参り	アド	弥右衛門・仁右衛門	駿府城三の丸慰み能、年月日は能之留帳	控
1613	4	5	弥太	花折しんぼち	シテ	弥右衛門他	駿府城三の丸慰み能、年月日は能之留帳、原弥右	控
1613	4	6	弥太	口まね	シテ	弥右衛門・行ぎ	駿府城三の丸慰み能、年月日は天慶元	控
1613	4	6	弥太	さつまのかみ	シテ	弥右衛門・久兵衛	同上	控
1613	4	6	弥太	能融	アイ	梅若	同上	控
1617	4	29	弥太郎	あさう	アド	仁右衛門・弥右衛門他	江戸城公家門跡衆饗応能	古4
1617	4	29	弥太郎	能田村	アイ	今春七郎	同上	古4
1617	4	29	弥太郎	今参	アド	弥右衛門・仁右衛門	同上	古4
1617	4	29	弥太郎	二千石	アド	弥右衛門	同上	古4
1617	4	29	弥太郎	能葵上	アイ	金剛大夫	同上	古4
1617	4	29	弥太郎	ふあく	アド	弥右衛門・仁右衛門	同上	古4
1617	5	13	弥太郎	能八嶋	アイ	今春七郎	将軍秀忠加賀筑前守利常邸御成能	古4
1617	5	13	弥太郎	文相撲	アド	弥右衛門・仁右衛門	同上	古4
1617	5	13	弥太郎	能鍾馗	アイ	今春七郎	同上	古4
1617	5	13	弥太郎	随方角	アド	弥右衛門・仁右衛門他	同上	古4
1617	5	13	弥太郎	福ノ神	アド	弥右衛門・仁右衛門	同上	古4
1617	5	14	弥太郎	三番三		今春七郎	加賀筑前守利常邸将軍御成済後宴能	古4
1617	5	14	弥太郎	能竹生嶋	アイ	今春七郎	同上	古4
1617	5	14	弥太郎	夷毘沙門	アド	弥右衛門・仁右衛門	同上	古4
1617	5	14	弥太郎	能三井寺	アドアイ	今春七郎	同上	古4
1617	5	14	弥太郎	磁石	アド	弥右衛門・甚兵衛	同上	古4
1617	5	18	弥太郎	千歳		今春七郎	将軍秀忠藤堂和泉守高虎邸御成能	古4
1617	5	18	弥太郎	庖丁聟	アド	弥右衛門・仁右衛門	同上	古4
1617	5	18	弥太郎	能道成寺	アドアイ	花崎左京	同上	古4
1617	5	18	弥太郎	文山立	アド	弥右衛門	同上	古4
1617	5	18	弥太郎	能玉葛	アイ	花崎左京	同上	古4
1617	5	19	弥太郎	能松風	アイ	浅井喜助	藤堂和泉守高虎邸将軍御成済後宴能	古4
1617	5	19	弥太郎	悪坊	アド	弥右衛門・甚兵衛	同上	古4
1617	5	19	弥太郎	能天鼓	アイ	花崎左京	同上	古4
1617	5	22	弥太郎	千歳		今春七郎	江戸城金春大蔵観世梅若能	古4
1617	5	22	弥太郎	庭鳥むこ	シテ	弥右衛門他	同上	古4
1617	5	22	弥太郎	三人片輪	アド	仁右衛門・弥右衛門他	同上	古4
1617	5	22	弥太郎	能藤永	アドアイ	今春七郎	同上	古4
1617	5	22	弥太郎	腹不立	アド	仁右衛門・久兵衛	同上	古4
1618	ウ3	20	弥太郎	能八嶋	アイ	今春七郎	将軍秀忠藤堂和泉守高虎邸御成能	古4
1618	ウ3	20	弥太郎	文相撲	アド	弥右衛門・仁右衛門	同上	古4
1618	ウ3	20	弥太郎	能邯鄲	アイ	花崎左京	同上	古4
1618	ウ3	20	弥太郎	磁石	アド	弥右衛門・権之丞	同上	古4
1618	ウ3	20	弥太郎	福の神	アド	弥右衛門・仁右衛門	同上	古4
1618	ウ3	21	弥太郎	夷毘沙門	シテ	権之丞・弥右衛門	藤堂和泉守高虎邸将軍御成済後宴能	古4
1618	ウ3	21	弥太郎	能井筒	アイ	花崎左京	同上	古4

Hosei University Repository

年	月	日	名前	演目	役名	他	備考	資料
1618	ウ3	21	弥太郎	三人片輪	アド	弥右衛門・仁右衛門他	同上	古4
1618	ウ3	21	弥太郎	能三輪	アイ	花崎左京	同上	古4
1618	ウ3	21	弥太郎	能項羽	アイ	今春八左衛門	同上	古4
1618	4	1	弥太郎	能通盛	アイ	今春七郎	江戸城四座立合能初日	古4
1618	4	1	弥太郎	入間川	アド	弥右衛門・仁右衛門	同上	古4
1618	4	1	弥太郎	連歌盗人	アド	仁右衛門・弥右衛門	同上	古4
1618	4	1	弥太郎	能三井寺	アドアイ	今春八郎	同上	古4
1618	4	1	弥太郎	悪坊	アド	弥右衛門・二郎八	同上	古4
1618	4	1	弥太郎	入間川	アド	弥右衛門・仁右衛門	同上	城
1618	4	1	弥太郎	悪坊	アド	弥右衛門・二良八	同上	城
1618	4	1	弥太郎	こしいのり	アド	仁右衛門・権之丞	同上、古は弥右衛門	城
1618	4	1	弥太郎	とびこへ	シテ	仁右衛門	同上、古は弥右衛門	城
1618	4	2	弥太郎	千歳		今春七郎	江戸城四座立合能後日	古4
1618	4	2	弥太郎	引敷むこ	アド	弥右衛門・仁右衛門他	同上	古4
1618	4	2	弥太郎	能江口	アイ	観世三十郎	同上	古4
1618	4	2	弥太郎	能龍田	アイ	今春八郎	同上	古4
1618	4	2	弥太郎	武悪	アド	弥右衛門・仁右衛門	同上	古4
1618	4	2	弥太郎	能世我意	アイ	観世三十郎	同上	古4
1618	4	2	弥太郎	脱	アド	弥右衛門	同上、大なへゆる、城は権之丞	古4
1618	4	2	弥太郎	ひつしきむこ	アド	弥右衛門・仁右衛門他	同上	城
1618	4	2	弥太郎	ふあく	アド	弥右衛門・仁右衛門	同上	城
1618	4	8	弥太郎	能竹生嶋	アイ	今春八左衛門	藤堂和泉守高虎邸能	古4
1618	4	8	弥太郎	八句連歌	アド	弥右衛門	同上	古4
1618	4	8	弥太郎	楽阿弥	シテ	権之丞・弥右衛門他	同上	古4
1618	4	8	弥太郎	能天鼓	アイ	花崎左京	同上	古4
1618	4	8	弥太郎	能融	アイ	花崎左京	同上	古4
1618	4	30	弥太郎	能盤	アイ	今春七郎	江戸城観世金春梅若能	古4
1618	4	30	弥太郎	今参	アド	弥右衛門・権之丞	同上	古4
1618	4	30	弥太郎	能天鼓	アイ	今春八郎	同上	古4
1618	4	30	弥太郎	庖丁むこ	アド	弥右衛門・仁右衛門他	同上	古4
1618	4	30	弥太郎	能空腹	アイ	梅若	同上	古4
1618	5	22	弥太郎	狐塚	アド	弥右衛門・仁右衛門	藤堂和泉守高虎邸能	古4
1618	5	22	弥太郎	能冨士太鼓	アイ	今春七郎	同上	古4
1618	5	22	弥太郎	能葵上	アイ	花崎左京	同上	古4
1618	6	11	弥太郎	千歳		今春七郎	江戸城公家衆饗応能	古4
1618	6	11	弥太郎	能白髭／道者	アドふな	弥右衛門・仁右衛門	同上	古4
1618	6	11	弥太郎	庭鳥むこ	シテ	仁右衛門・二郎八他	同上	古4
1618	6	11	弥太郎	三人片輪	アド	弥右衛門・仁右衛門他	同上	古4
1618	6	11	弥太郎	能鍾馗	アイ	今春七郎	同上	古4
1618	6	11	弥太郎	薩摩守	シテ	弥右衛門・権之丞	同上	古4
1618	8	6	弥太郎	無縁猩	アド	弥右衛門・仁右衛門他	江戸城観世金春能	古4
1618	8	6	弥太郎	能東北	アイ	今春七郎	同上	古4
1618	8	6	弥太郎	伯養	アド	弥右衛門・権之丞	同上	古4
1618	8	6	弥太郎	能項羽	アイ	大蔵大夫	同上	古4
1618	8	6	弥太郎	能空八舟行	アイ	今春八郎	同上	古4
1618	8	6	弥太郎	竹の子	アド	弥右衛門・仁右衛門	同上	古4
1618	8	18	弥太郎	能田村	アイ	今春七郎	若君家光藤堂和泉守高虎邸御成能	古4
1618	8	18	弥太郎	随方角	アド	弥右衛門・権之丞	同上	古4
1618	8	18	弥太郎	能融	アイ	花崎左京	同上	古4
1620	3	1	弥太郎	三番三		金剛新太郎	高安太郎左衛門堺勧進能初日	控
1620	3	1	弥太郎	ゐひすひしやもん	アド	弥右衛門・万介	同上	控
1620	3	1	弥太郎	今まいり	アド	弥右衛門・弥次	同上	控
1620	3	1	弥太郎	三人かたは	シテ	市兵衛・三吉・おき	同上	控
1620	3	2	弥太郎	あさう	シテ	弥次・万介・三吉	高安太郎左衛門堺勧進能二日目	控
1620	3	2	弥太郎	能葵上	アイ	新太郎	同上	控
1620	3	2	弥太郎	ふくろう	シテ	弥次・甚兵衛	同上	控
1620	3	3	弥太郎	三番		新太郎	高安太郎左衛門堺勧進能三日目	控
1620	3	3	弥太	たうずまふ	シテ	おき・万介他	同上	控
1620	3	3	弥太	しうろん	アド	弥右・甚兵衛	同上	控
1620	3	3	弥太	らくあみ	シテ	おき・三吉	同上	控
1620	3	4	弥太	さつまのかみ	シテ	弥右・甚兵衛	高安太郎左衛門堺勧進能四日目	控
1620	3	4	弥太郎	二千石	シテ	市兵衛	同上	控
1620	3	4	弥太郎	ぢしやく	アド	弥右・三吉	同上	控
1620	5	14	弥太郎	能八嶋／那須与市	シテ		江戸城四座能	古4
1620	5	14	弥太郎	鼻取相撲	アド	弥右衛門・権之丞	同上	古4
1620	5	14	弥太郎	あさいな	アド	弥右衛門	同上	古4
1620	5	14	弥太郎	棒しばり	アド	弥右衛門・仁右衛門	同上	古4

Hosei University Repository

年	月	日	名前	演目	役名	他	備考	資料
1620	5	14	弥太郎	薩摩守	シテ	弥右衛門・弥次兵衛	同上	古4
1620	7	1	弥太郎	千歳		今春七郎	江戸城三座能	古4
1620	7	1	弥太郎	夷大黒	アド	弥右衛門・権之丞	同上	古4
1620	7	1	弥太郎	秀句傘	アド	仁右衛門・権之丞	同上	古4
1620	7	1	弥太郎	能玉葛	アイ	観世三十郎	同上	古4
1620	7	1	弥太郎	武悪	アド	弥右衛門・仁右衛門	同上	古4
1620	7	1	弥太郎	能放下僧	アイ	梅若	同上	古4
1620	7	1	弥太郎	どぶがつちり	アド	弥右衛門・権之丞	同上	古4
1620	7	1	弥太郎	能錦戸	オモアイ	梅若	同上	古4
1620	8	6	弥太	なへ八ばち	シテ	権之丞・三吉	七大夫御成橋勘進能初日	控
1620	8	6	弥太	あさう	アド	二右・権之丞・三吉	同上	控
1620	8	6	弥太	能舟弁慶	アイ	七大夫	同上	控
1620	8	6	弥太	くび引	アド	権之丞・弥一郎	同上	控
1620	8	7	弥太	三番三		七大夫	七大夫御成橋勘進能二日目	控
1620	8	7	弥太	能白髭／道者	シテ	権之丞・弥次他	同上、原白髪、道者不記	控
1620	8	7	弥太	たうずまう	アド	二右衛門・権之丞他	同上	控
1620	8	7	弥太	三人がたわ	シテ	権之丞・三吉・弥次	同上	控
1620	8	7	弥太	したうはうがく	アド	権之丞・半三郎	同上	控
1620	8	7	弥太	らくあみ	アド	弥右・弥次・二郎八	同上	控
1620	8	7	弥太	能三井寺	オモアイ	七大夫	同上	控
1620	8	8	弥太	松やに	シテ	甚兵衛・三吉他	七大夫御成橋勘進能三日目	控
1620	8	8	弥太	能自然居士	アイ	七大夫	同上	控
1620	8	9	弥太	ちぎり木	アド	権之丞他	七大夫御成橋勘進能四日目	控
1620	8	9	弥太郎	二千石	シテ	権之丞	同上	控
1620	8	25	弥太郎	なへ八桧	アド	仁右衛門・権之丞	江戸城三座能	古4
1620	8	25	弥太郎	粟田口	アド	弥右衛門・権之丞	同上	古4
1620	8	25	弥太郎	能船弁慶	アイ	大蔵大夫	同上	古4
1620	8	25	弥太郎	能邯鄲	アイ	七大夫	同上	古4
1620	8	25	弥太郎	悪坊	アド	弥右衛門・弥次兵衛	同上	古4
1620	9	11	弥太郎	三番三		今春七郎	江戸城公家衆饗応能	古4
1620	9	11	弥太郎	能白髭	アドアイ	今春七郎	同上	古4
1620	9	11	弥太郎	唐相撲	アド通し	弥右衛門・権之丞他	同上	古4
1620	9	11	弥太郎	あさう	アド	弥右衛門・権之丞他	同上	古4
1620	9	11	弥太郎	いくゐ	シテ	弥右衛門・仁右衛門	同上	古4
1620	9	25	弥太郎	三本ノ柱	アド	仁右衛門・弥右衛門他	江戸城三座能	古4
1620	9	25	弥太郎	今参	アド	弥右衛門・権之丞	同上	古4
1620	9	25	弥太郎	能東北	アイ	今春七郎	同上	古4
1620	9	25	弥太郎	二千石	アド	権之丞	同上	古4
1620	9	25	弥太郎	盗人ノ子	アド女	弥右衛門・仁右衛門	同上	古4
1620	9	25	弥太郎	能鞍馬天狗	アドアイ	七大夫	同上	古4
1621	4	6	弥太郎	今参	アド	弥右衛門・権之丞	江戸城饗応能初日	古4
1621	4	6	弥太郎	能三輪	アイ	北左京	同上	古4
1621	4	7	弥太郎	千歳		今春七郎	江戸城饗応能後日	古4
1621	4	7	弥太郎	能白楽天	アイ	今春七郎	同上	古4
1621	4	7	弥太郎	粟田口	アド	仁右衛門・権之丞	同上	古4
1621	4	7	弥太郎	よね一	アド	弥右衛門・権之丞他	同上	古4
1621	4	7	弥太郎	ふあく	アド	弥右衛門・仁右衛門	同上	古4
1621	4	7	弥太郎	能天鼓	アイ	観世三十郎	同上	古4
1621	5	3	弥太郎	柿山伏	アド	弥右衛門	江戸城三座能	古4
1621	5	3	弥太郎	墨塗	アド女	仁右衛門・徳右衛門	同上	古4
1621	5	3	弥太郎	さいの目	シテ	弥右衛門他	同上	古4
1621	6	3	弥太郎	三番三		北七大夫	江戸城慰み能	古4
1621	6	3	弥太郎	唐相撲	アド通し	弥右衛門・権之丞他	同上	古4
1621	6	3	弥太郎	能東北	アイ	北七大夫	同上	古4
1621	6	3	弥太郎	ふす	シテ	弥右衛門・権之丞	同上	古4
1621	6	3	弥太郎	鼻取相撲	アド	弥右衛門・徳右衛門	同上	古4
1621	8	12	弥太郎	能自然居士	アイ	北七大夫	大納言家光藤堂和泉守高虎邸御成能	古4
1621	8	12	弥太郎	三人片輪	アド	弥右衛門・権之丞他	同上	古4
1621	8	13	弥太郎	能賀茂／田植	シテ		藤堂和泉守高虎邸御成済後宴能	古4
1621	8	13	弥太郎	能三輪	アイ	北左京	同上	古4
1621	8	13	弥太郎	二九十八	シテ	弥次兵衛	同上	古4
1621	9	12	弥太郎	庭鳥むこ	アド	権之丞・弥右衛門他	江戸城三大名饗応能	古4
1621	9	12	弥太郎	盗人の子	アド	弥右衛門・弥次兵衛	同上	古4
1621	9	12	弥太郎	鈍太郎	アド	徳右衛門・権之丞他	同上	古4
1621	9	12	弥太郎	随方角	シテ	弥右衛門・徳右衛門他	同上	古4
1622	2	10	弥太郎	聟入	シテ	弥太郎弟	薪能初日南大門能	薪
1623	2	13	弥太郎	能八嶋	アイ	北七大夫	大御所秀忠尾張藩邸御成能	尾張御成

Hosei University Repository

91　大蔵虎明上演年譜考

年	月	日	名前	演目	役名	他	備考	資料
1623	2	13	弥太郎	二千石	シテ		同上	尾張御成
1623	2	13	弥太郎	能紅葉狩	アイ	北七大夫	同上	尾張御成
1623	2	18	弥太郎	三番叟		観世三十郎	大納言家光尾張藩邸御成能	尾張御成
1623	8	16	弥太郎	千歳		金春重勝	二条城家光将軍宣下祝賀能後日、二拾七歳	宣
1624	1	23	弥太郎	鹿島むこ	アド	権之丞・弥右衛門他	大御所秀忠紀伊中納言頼宣邸御成能	古7
1624	1	23	弥太郎	能頼政	アイ	北七大夫	同上	古7
1624	1	23	弥太郎	能自然居士	アイ	北七大夫	同上	古7
1624	1	23	弥太郎	ふす	アド	弥右衛門・権之丞	同上	古7
1624	1	27	弥太郎	夷毘沙門	アド	権之丞・五郎兵衛	将軍家光紀伊中納言頼宣邸御成能	古7
1624	1	27	弥太郎	能八嶋	アイ	北七大夫	同上	古7
1624	1	28	弥太郎	今参	アド	弥右衛門・八右衛門	紀伊中納言頼宣邸御成済後宴能	古7
1624	2	6	弥太郎	三番三		観世左近	大御所秀忠水戸宰相頼房邸御成能	古7
1624	2	6	弥太郎	能玉井	アイ	観世左近	同上	古7
1624	2	6	弥太郎	鍋八抱	アド	弥右衛門・権之丞	同上	古7
1624	2	6	弥太郎	文相撲	アド	仁右衛門・権之丞	同上	古7
1624	2	6	弥太郎	枭	アド	弥右衛門・金右衛門	同上	古7
1624	2	6	弥太郎	腹不立	シテ	弥右衛門・佐左衛門	同上	古7
1624	2	10	弥太郎	三番三		観世左近	将軍家光水戸宰相頼房邸御成能	古7
1624	2	10	弥太郎	能高砂	アイ	観世左近	同上	古7
1624	2	10	弥太郎	せんし物	アド	弥右衛門他	同上	古7
1624	2	10	弥太郎	墨塗	アド	仁右衛門・権之丞	同上	古7
1624	2	10	弥太郎	比丘貞	アド	弥右衛門・太郎右衛門	同上	古7
1624	2	11	弥太郎	八尾	アド	弥右衛門	水戸宰相頼房邸御成済後宴能	古7
1624	2	11	弥太郎	三人片輪	シテ	市兵衛・佐左衛門他	同上	古7
1624	2	20	弥太郎	能三輪	アイ	桜井八右衛門	将軍家光伊達陸奥守政宗邸御成能	古7
1624	2	28	弥太郎	腰折	アド	仁右衛門・権之丞	江戸城本丸奥舞台能	古7
1624	2	28	弥太郎	宗論	アド	弥右衛門・仁右衛門	同上	古7
1624	2	28	弥太郎	朝狼	アド	仁右衛門・権之丞	同上	古7
1624	2	28	弥太郎	能冨士太鼓	アイ	北七大夫	同上	古7
1624	2	28	弥太郎	柿山伏	アド	弥右衛門	同上	古7
1624	2	28	弥太郎	能三輪	アイ	観世左近	同上	古7
1624	2	28	弥太郎	石神	アド女	権之丞・弥右衛門	同上	古7
1624	2	28	弥太郎	能海士	アイ	北七大夫	同上	古7
1624	2	28	弥太郎	二人袴	シテ	権之丞・弥右衛門他	同上	古7
1624	2	28	弥太郎	能葛城天狗	オモアイ	北七大夫	同上	古7
1624	3	15	弥太郎	唐相撲	アド	仁右衛門・権之丞他	江戸城西丸能	古7
1624	3	15	弥太郎	能道成寺	アドアイ	北七大夫	同上	古7
1624	3	15	弥太郎	首引	アド	弥右衛門他	同上	古7
1624	3	15	弥太郎	能花月	アイ	今春七郎	同上	古7
1624	4	5	弥太郎	三番三		今春七郎	将軍家光蒲生下野守忠郷邸御成能	古7
1624	4	5	弥太郎	腰折	アド	弥右衛門・権之丞	同上	古7
1624	4	5	弥太郎	墨ぬり	アド女	仁右衛門・権之丞	同上	古7
1624	4	5	弥太郎	楽あみ	アド	弥右衛門・佐左衛門他	同上	古7
1624	4	14	弥太郎	さいの目	アド	権之丞・仁右衛門他	大御所秀忠蒲生下野守忠郷邸御成能	古7
1624	4	14	弥太郎	能景平	アイ	今春七郎	同上	古7
1624	4	14	弥太郎	萩大名	アド	弥右衛門・権之丞	同上	古7
1624	4	14	弥太郎	能蝸	アイ	北七大夫	同上	古7
1624	4	14	弥太郎	二人大名	シテ	弥右衛門・権之丞	同上	古7
1624	4	14	弥太郎	能鄙鄙	アイ	北七大夫	同上	古7
1624	4	15	弥太郎	三番三		観世左近	蒲生下野守忠郷邸御成済後宴能	古7
1624	4	15	弥太郎	あさう	アド	弥右衛門・喜左衛門	同上	古7
1624	4	15	弥太郎	二千石	シテ	弥右衛門	同上	古7
1624	8	17	弥太郎	舞三人夫キリ	アド	弥右衛門・八右衛門	将軍家光上野寛永寺御成囃子	古7
1624	9	6	弥太郎	千歳		今春七郎	江戸城本丸奥舞台下掛り能	古7
1624	9	6	弥太郎	能竹生嶋	アイ	今春七郎	同上	古7
1624	9	6	弥太郎	庖丁むこ	シテ	弥右衛門・弥二兵衛他	同上	古7
1624	9	6	弥太郎	能天鼓	アイ	北七大夫	同上	古7
1624	9	6	弥太郎	鼻取相撲	アド	弥右衛門・八右衛門	同上	古7
1624	9	6	弥太郎	茶つぼ	シテ	弥右衛門・喜左衛門	同上	古7
1624	9	20	弥太郎	舞もちさけキリ	アド	弥右衛門・八右衛門	将軍家光金地院御成囃子	古7
1624	9	20	弥太郎	舞くらまいりキリ	アド	弥右衛門	同上	古7
1624	11	13	弥太郎	墨塗	アド	弥右衛門・権之丞	江戸城本丸わたまし祝賀公家衆饗応能	古7
1624	11	15	弥太郎	能田村	アイ	今春七郎	江戸城西丸わたまし祝賀公家衆饗応能	古7
1624	11	15	弥太郎	楽阿み	アド	弥右衛門・市兵衛他	同上	古7
1624	11	15	弥太郎	朝狼	アド	仁右衛門・権之丞他	同上	古7
1624	11	15	弥太郎	能藤永	アドアイ	今春七郎	同上	古7
1624	11	15	弥太郎	枭	シテ	権之丞・四郎兵衛	同上	古7

Hosei University Repository

年	月	日	名前	演目	役名	他	備考	資料
1624	11	15	弥太郎	二千石	アド	権之丞	同上	古7
1624	12	4	弥太郎	あさう	アド	仁右衛門・権之丞他	大御所秀忠江戸城本丸御成能	古7
1624	12	4	弥太郎	今参	アド	弥右衛門・八右衛門	同上	古7
1624	12	4	弥太郎	口真似	アド	権之丞・弥一郎	同上	古7
1624	12	4	弥太郎	能海士	アイ	北七大夫	同上	古7
1625	2	5	弥太郎	能真盛	アイ	北七大夫	大御所秀忠駿河中納言忠長邸御成能	古7
1625	2	5	弥太郎	太刀奪	アド	弥右衛門・八右衛門	同上	古7
1625	2	12	弥太郎	めちか	アド	仁右衛門・権之丞他	将軍家光駿河中納言忠長邸御成能	古7
1625	2	12	弥太郎	犬山伏	アド	弥右衛門・権之丞他	同上	古7
1625	2	13	弥太郎	夷毘沙門	アド	弥右衛門・五郎左衛門	駿河中納言忠長邸御成済後宴能	古7
1625	2	13	弥太郎	老武者	アド	弥右衛門他	同上	古7
1625	2	26	弥太郎	引敷むこ	アド	権之丞・仁右衛門他	将軍家光尾張中納言義直邸御成能	古7
1625	2	26	弥太郎	墨ぬり	アド	弥右衛門・権之丞	同上	古7
1625	2	27	弥太郎	鍋八枹	アド	弥右衛門・市兵衛	尾張中納言義直邸御成済後宴能	古7
1625	2	27	弥太郎	幕方角	シテ	五郎左衛門・佐左衛門	同上	古7
1625	3	8	弥太郎	能玉井	アイ	観世三十郎	大御所秀忠尾張中納言義直邸御成能	古7
1625	3	8	弥太郎	庭鳥むこ	アド	八右衛門・弥右衛門他	同上	古7
1625	3	8	弥太郎	秀句傘	アド	仁右衛門・権之丞	同上	古7
1625	3	8	弥太郎	能芭蕉	アイ	北七大夫	同上	古7
1625	3	8	弥太郎	荻大名	アド	弥右衛門・権之丞	同上	古7
1625	3	8	弥太郎	能邯鄲	アイ	観世三十郎	同上	古7
1625	3	8	弥太郎	墨途	アド	仁右衛門・権之丞	同上	古7
1625	4	6	弥太郎	あさう	アド	仁右衛門・権之丞他	江戸城本丸能	古7
1625	4	6	弥太郎	墨ぬり	アド	弥右衛門・権之丞	同上	古7
1625	4	6	弥太郎	比丘貞	アド	権之丞・弥一郎	同上	古7
1625	4	6	弥太郎	能百万	アイ	北七大夫	同上	古7
1625	4	8	弥太郎	千歳		今春七郎	江戸城西丸能	古7
1625	4	8	弥太郎	能賀茂／田植	シテ		同上	古7
1625	4	8	弥太郎	せんし物	アド	弥右衛門・権之丞他	同上	古7
1625	4	8	弥太郎	粟田口	アド	仁右衛門・権之丞	同上	古7
1625	4	8	弥太郎	能渇	アイ	観世三十郎	同上	古7
1625	4	8	弥太郎	二人大名	シテ	八右衛門・弥右衛門	同上	古7
1625	5	7	弥太郎	三番三／田歌ふし		今春七郎	江戸城本丸諸門跡饗応能	古7
1625	5	7	弥太郎	能嵐山／さるむこ	シテ	弥右衛門他	同上	古7
1625	5	7	弥太郎	水懸婿	シテ	弥右衛門・権之丞	同上	古7
1625	5	7	弥太郎	よね市	アド	権之丞・仁右衛門他	同上	古7
1625	5	7	弥太郎	釣狐	アド	弥右衛門	同上	古7
1625	5	7	弥太郎	能自然居士	アイ	北七大夫	同上	古7
1625	5	11	弥太郎	音曲むこ	アド	権之丞・仁右衛門	江戸城西丸諸門跡饗応能	古7
1625	5	11	弥太郎	枭	アド	弥右衛門・権之丞	同上	古7
1625	5	11	弥太郎	能道成寺	オモアイ	今春七郎	同上	古7
1625	5	11	弥太郎	能天鼓	アイ	北七大夫	同上	古7
1625	5	11	弥太郎	見ごいの祭花	シテ	弥右衛門・弥二兵衛	同上	古7
1625	5	28	弥太郎	引敷むこ	アド	権之丞・仁右衛門他	大御所秀忠藤堂和泉守高虎邸御成能	古7
1625	5	28	弥太郎	花盗人	シテ	弥右衛門・八右衛門他	同上	古7
1625	5	28	弥太郎	能渇	アイ	観世三十郎	同上	古7
1625	5	28	弥太郎	腸礫	アド	弥右衛門・弥二兵衛	同上	古7
1625	5	28	弥太郎	能葵上	アイ	北左京	同上	古7
1625	5	28	弥太郎	能紅葉狩	アイ悪女	今春七郎	同上、シテ不記、城による	古7
1625	6	28	弥太郎	唐相撲	アド	仁右衛門・権之丞他	将軍家光藤堂和泉守高虎邸御成能	古7
1625	6	28	弥太郎	墨ぬり	アド	弥右衛門・権之丞	同上	古7
1625	6	28	弥太郎	能三井寺	オモアイ	今春七郎	同上	古7
1625	6	29	弥太郎	三番三		今春七郎	藤堂和泉守高虎邸御成済後宴能	古7
1625	6	29	弥太郎	鎧	アド	八右衛門・弥右衛門	同上	古7
1625	7	7	弥太郎	千歳		今春七郎	江戸城西丸七夕能	古7
1625	7	7	弥太郎	能嵐山／さる聟	シテ	権之丞他	同上	古7
1625	7	7	弥太郎	牛馬	アド	弥右衛門・権之丞	同上	古7
1625	7	7	弥太郎	秀句傘	アド	仁右衛門・権之丞	同上	古7
1625	7	7	弥太郎	釣狐	アド	弥右衛門	同上	古7
1625	7	7	弥太郎	せつぶん	シテ	弥二兵衛	同上	古7
1625	7	7	弥太郎	柿山伏	アド	弥右衛門	江戸城西丸七夕能	古7
1625	8	15	弥太郎	唐相撲	アド	仁右衛門・権之丞他	江戸城本丸能	古7
1625	8	15	弥太郎	能道成寺	アドアイ	今春七郎	同上	古7
1625	9	12	弥太郎				江戸城本丸能、煩にて出ず	古7
1625	9	15	弥太郎				江戸城西丸右大臣饗応能、煩よくなく出ず	古7
1625	11	21	弥太郎	三番三		北七大夫	江戸城本丸公家門跡等饗応能	古7
1625	11	21	弥太郎	能高砂	アイ	北七大夫	同上	古7

Hosei University Repository

93　大蔵虎明上演年譜考

年	月	日	名前	演目	役名	他	備考	資料
1625	11	21	弥太郎	せんし物	アド	弥右衛門他	同上	古7
1625	11	21	弥太郎	いく井	アド	八右衛門・弥右衛門	同上	古7
1625	11	23	弥太郎	千歳		北七大夫	江戸城西丸公家門跡等饗応能	古7
1625	11	23	弥太郎	能和布刈	アイ	北七大夫	同上	古7
1625	11	23	弥太郎	唐相撲	アド	弥右衛門・権之丞他	同上	古7
1625	11	23	弥太郎	栗焼	シテ	弥右衛門	同上	古7
1626	9	9	弥太郎	末広	アド	仁右衛門・権之丞	二条城後水尾天皇行幸能	古7
1626	9	9	弥太郎	能田村	アイ	今春七郎	同上	古7
1626	9	9	弥太郎	今参	アド	弥右衛門・権之丞	同上	古7
1626	9	9	弥太郎	いくゐ	アド	仁右衛門・弥右衛門	同上	古7
1626	9	9	弥太郎	武悪	アド	弥右衛門・仁右衛門	同上	古7
1626	9	9	弥太郎	墨塗	アド女	仁右衛門・権之丞	同上	古7
1626	9	9	弥太郎	能三輪	アイ	今春七郎	同上	古7
1626	9	9	弥太郎	能藤永	アドアイ	今春七郎	同上	古7
1626	9	9	弥太郎	靭猿	アド	仁右衛門・権之丞	同上	古7
1626	9	9	弥太郎	すゑひろかり	アドうりて	仁右衛門・権之丞	二条城後水尾天皇行幸能	捨
1626	9	9	弥太郎	能田村	アイ	今春七郎	同上	捨
1626	9	9	弥太郎	いままいり	アドしんざ	弥右衛門・権之丞	同上	捨
1626	9	9	弥太郎	いぐゐ	アドしう	仁右衛門・弥右衛門	同上	捨
1626	9	9	弥太郎	ふあく	アド下人	弥右衛門・仁右衛門	同上	捨
1626	9	9	弥太郎	すみぬり	アド女	仁右衛門・権之丞	同上	捨
1626	9	9	弥太郎	能三輪	アイ	今春七郎	同上	捨
1626	9	9	弥太郎	能藤永	アドアイ	今春七郎	同上	捨
1626	9	9	弥太郎	うつほさる	アド下人	仁右衛門・権之丞他	同上	捨
1626	9	9	弥太郎	末ひろかり	アドうりて	仁右衛門・権之丞	二条城後水尾天皇行幸能	捨
1626	9	9	弥太郎	能田村	アイ	今春七郎	同上	捨
1626	9	9	弥太郎	今まいり	アドしんさ	弥右衛門・権之丞	同上	捨
1626	9	9	弥太郎	いぐゐ	アドしう	仁右衛門・弥右衛門	同上	捨
1626	9	9	弥太郎	ふあく	アド下人	弥右衛門・仁右衛門	同上	捨
1626	9	9	弥太郎	すみぬり	アド女	仁右衛門・権之丞	同上	捨
1626	9	9	弥太郎	能三輪	アイ	今春七郎	同上	捨
1626	9	9	弥太郎	能藤永	アドアイ	今春七郎	同上	捨
1626	9	9	弥太郎	うつほさる	アド下人	仁右衛門・権之丞他	同上	捨
1626	9	9	弥太郎	すゑひろかり	アド	仁右衛門・権之丞	二条城後水尾天皇行幸能	行幸仙洞
1626	9	9	弥太郎	能田村	アイ	今春大夫	同上	行幸仙洞
1626	9	9	弥太郎	今参	アド	弥右衛門・権之丞	同上	行幸仙洞
1626	9	9	弥太郎	いくゐ	アド	仁右衛門・弥右衛門	同上	行幸仙洞
1626	9	9	弥太郎	ふあく	アド	弥右衛門・仁右衛門	同上	行幸仙洞
1626	9	9	弥太郎	すみぬり	アド	仁右衛門・権之丞	同上	行幸仙洞
1626	9	9	弥太郎	能三輪	アイ	今春大夫	同上	行幸仙洞
1626	9	9	弥太郎	能藤永	アドアイ	今春大夫	同上	行幸仙洞
1626	9	9	弥太郎	靭猿	アド	仁右衛門・権之丞	同上	行幸仙洞
1626	11	28	弥太郎	大山伏	アド	弥右衛門	春日若宮祭礼後日能	若宮
1627	2	27	弥太郎	文相撲	アド	弥右衛門・八右衛門	大御所秀忠江戸城本丸御成能	古7
1627	2	27	弥太郎	粟田口	アド	仁右衛門・権之丞	同上	古7
1627	2	27	弥太郎	枭	アド	弥右衛門・喜左衛門	同上	古7
1627	2	27	弥太郎	能天鼓	アイ	北七大夫	同上	古7
1627	2	27	弥太郎	靭猿	アド	仁右衛門・権之丞	同上	古7
1627	2	27	弥太郎	いく井	アドしう	弥右衛門・仁右衛門	同上	古7
1627	3	2	弥太郎	三番三		観世三十郎	大御所秀忠駿河大納言忠長邸御成能	古7
1627	3	2	弥太郎	能玉井／貝尽し	シテ	喜左衛門・八右衛門他	同上、貝尽し不記	古7
1627	3	2	弥太郎	音曲むこ	シテ	弥右衛門・権之丞他	同上	古7
1627	3	2	弥太郎	墨ぬり	アド女	仁右衛門・権之丞	同上	古7
1627	3	2	弥太郎	よね市	アド	弥右衛門・権之丞他	同上	古7
1627	3	2	弥太郎	能三井寺	アドアイ	北七大夫	同上	古7
1627	3	2	弥太郎	萩大名	アド	弥右衛門・喜左衛門	同上	古7
1627	3	2	弥太郎	能海士	アイ	観世三十郎	同上	古7
1627	3	9	弥太郎	三番三		観世三十郎	将軍家光駿河大納言忠長邸御成能	古7
1627	3	9	弥太郎	能白楽天	アイ	観世三十郎	同上	古7
1627	3	9	弥太郎	あさう	アド	仁右衛門・権之丞他	同上	古7
1627	3	9	弥太郎	腹不立	アド	弥右衛門・喜左衛門	同上	古7
1627	3	9	弥太郎	能自然居士	アイ	北七大夫	同上	古7
1627	3	9	弥太郎	鍋矢倉	アド	弥右衛門・権之丞他	同上	古7
1627	3	21	弥太郎	三番三		今春七郎	江戸城本丸諸大名饗応能	古7
1627	3	21	弥太郎	能高砂	アイ	今春七郎	同上	古7
1627	3	21	弥太郎	引敷むこ	アド	弥右衛門・八右衛門他	同上	古7
1627	3	21	弥太郎	悪坊	アド	弥右衛門・金右衛門	同上	古7

Hosei University Repository

年	月	日	名前	演目	役名	他	備考	資料
1627	3	21	弥太郎	能三井寺	オモアイ	北七大夫	同上	古7
1627	4	16	弥太郎	夷毘沙門	アド	仁右衛門・権之丞	江戸城本丸公家衆饗応能	古7
1627	4	16	弥太郎	楽阿弥	アド	弥右衛門・喜左衛門他	同上	古7
1627	4	16	弥太郎	能葵上	アイ	北七大夫	同上	古7
1627	4	16	弥太郎	宗論	アド	弥右衛門・八右衛門	同上	古7
1627	4	22	弥太郎	庖丁むこ	アド	権之丞・仁右衛門他	江戸城西丸公家衆饗応能	古7
1627	4	22	弥太郎	骨皮	アド	弥右衛門・権之丞他	同上	古7
1627	4	22	弥太郎	狼座頭	アド	弥右衛門・弥二兵衛他	同上	古7
1627	4	22	弥太郎	能冨士太鼓	アイ	北七大夫	同上	古7
1627	4	22	弥太郎	狐塚	アド	仁右衛門・権之丞	同上	古7
1627	4	22	弥太郎	比丘貞	アド	弥右衛門・四郎兵衛	同上	古7
1627	5	3	弥太郎	千歳		今春七郎	大御所秀忠尾張大納言義直邸御成能	古7
1627	5	3	弥太郎	庭鳥むこ	シテ	弥右衛門・権之丞他	同上	古7
1627	5	3	弥太郎	きかす座頭	シテ	弥二兵衛・八右衛門	同上	古7
1627	5	3	弥太郎	能邯鄲	アイ	観世三十郎	同上	古7
1627	5	3	弥太郎	腰蝶	アド	弥右衛門・弥二兵衛	同上	古7
1627	5	3	弥太郎	能藤戸	アイ	北七大夫	同上	古7
1627	5	14	弥太郎	八幡前	アド	仁右衛門・権之丞他	大御所秀忠水戸中納言頼房邸御成能	古8
1627	5	14	弥太郎	二千石	アド	弥右衛門	同上	古8
1627	5	14	弥太郎	磁石	アド	弥右衛門・八右衛門	同上	古8
1627	5	14	弥太郎	能項羽	アイ	今春七郎	同上	古8
1627	5	14	弥太郎	秀句傘	アド	仁右衛門・権之丞	同上	古8
1627	5	14	弥太郎	盆山	アド	弥右衛門	同上	古8
1627	6	14	弥太郎	千歳		今春七郎	江戸城西丸諸大名饗応能、原13日、日は実紀	古8
1627	6	14	弥太郎	能源太夫	アイ	今春七郎	同上	古8
1627	6	14	弥太郎	夷毘沙門	アド	弥右衛門・権之丞	同上	古8
1627	6	14	弥太郎	靭猿	アド	仁右衛門・権之丞他	同上	古8
1627	6	14	弥太郎	能道成寺	アドアイ	北七大夫	同上	古8
1627	6	14	弥太郎	釣狐	アド	弥右衛門	同上	古8
1627	6	14	弥太郎	犬山伏	アド	弥右衛門・弥次兵衛	同上	古8
1627	6	21	弥太郎	唐相撲	アド	仁右衛門・権之丞他	将軍家光尾張大納言義直邸御成能	古8
1627	6	21	弥太郎	首引	アド	弥右衛門・喜左衛門他	同上	古8
1627	6	21	弥太郎	狼座頭	アド	弥右衛門・弥次兵衛他	同上	古8
1627	6	28	弥太郎	三番三		今春七郎	将軍家光水戸中納言頼房邸御成能、寛永は7月3日	古8
1627	6	28	弥太郎	能嵐山／申楽	シテ	弥右衛門他	同上	古8
1627	6	28	弥太郎	朝生	アド	弥右衛門・八右衛門他	同上	古8
1627	6	28	弥太郎	能藤戸	アイ	北七大夫	同上	古8
1627	6	28	弥太郎	枕物狂	アド	弥右衛門・喜左衛門他	同上	古8
1627	7	16	弥太郎	能賀茂／田植	シテ	皆々	永井信濃守尚政邸稽古能、原5月6日、月日は寛永	古7
1627	7	16	弥太郎	庖丁むこ	シテ	権之丞・弥二兵衛他	同上	古7
1627	7	16	弥太郎	能道成寺	アドアイ	北七大夫	同上	古7
1627	7	16	弥太郎	三人片輪	アド	弥右衛門・弥二兵衛他	同上	古7
1627	7	24	弥太郎	三本柱	アド	仁右衛門・権之丞他	大御所秀忠駿河大納言忠長邸御成能	古8
1627	7	24	弥太郎	昆布売	アド	弥右衛門	同上	古8
1627	7	24	弥太郎	能邯鄲	アイ	北七大夫	同上	古8
1627	7	24	弥太郎	首引	アド	弥右衛門他	同上	古8
1627	9	10	弥太郎	三番三		今春七郎	大御所秀忠江戸城本丸御成能	古8
1627	9	10	弥太郎	能白髭／道者	アド	弥右衛門他	同上	古8
1627	9	10	弥太郎	引敷むこ	シテ	弥右衛門・八右衛門他	同上	古8
1627	9	10	弥太郎	今参	アド	弥右衛門・熊蔵	同上	古8
1627	9	10	弥太郎	能船弁慶	アイ	北七大夫	同上	古8
1627	9	10	弥太郎	子盗人	アド	弥右衛門・弥二兵衛	同上	古8
1627	9	10	弥太郎	萩大名	アド	弥右衛門・喜左衛門	同上	古8
1627	9	22	弥太郎	能白楽天	アイ	今春七郎	江戸城本丸公家門跡等饗応能	古8
1627	9	22	弥太郎	あさう	アド	弥右衛門・八右衛門他	同上	古8
1627	9	22	弥太郎	地蔵舞	アド	熊蔵	同上	古8
1627	9	22	弥太郎	能道成寺	アドアイ	今春七郎	同上	古8
1627	9	22	弥太郎	悪坊	アド	弥右衛門	同上	古8
1627	9	22	弥太郎	蟹山伏	アド	弥右衛門・喜左衛門	同上	古8
1627	9	27	弥太郎	鍋八槌	アド	弥右衛門・八右衛門	江戸城西丸公家門跡等饗応能	古8
1627	9	27	弥太郎	薩广守	アド	熊蔵・弥二兵衛	同上	古8
1627	9	27	弥太郎	能天鼓	アイ	今春七郎	同上	古8
1627	9	27	弥太郎	ぬけから	アド	弥右衛門	同上	古8
1627	9	27	弥太郎	文山立	アド	弥右衛門	同上	古8
1627	10	12	弥太郎	三番三		今春七郎	大御所秀忠駿河大納言忠長邸御成能	古8
1627	10	12	弥太郎	能竹生嶋	アイ	今春七郎	同上	古8
1627	10	12	弥太郎	八幡前	シテ	弥右衛門・八右衛門他	同上	古8

Hosei University Repository

年	月	日	名前	演目	役名	他	備考	資料
1627	10	12	弥太郎	梟	アド	弥右衛門・弥二兵衛	同上	古8
1627	10	12	弥太郎	随方角	アド	弥右衛門・喜左衛門他	同上	古8
1627	10	12	弥太郎	あかゝり	アド	熊蔵	同上	古8
1627	10	12	弥太郎	腹不立	シテ	弥右衛門・八右衛門	同上、御所望	古8
1627	10	12	弥太郎	能自然居士	アイ	北七大夫	同上、御所望	古8
1627	10	22	弥太郎	三番三		今春七郎	将軍家光駿河大納言忠長邸御成能	古8
1627	10	22	弥太郎	能賀茂／田植	シテ		同上	古8
1627	10	22	弥太郎	唐相撲	アド	弥右衛門・喜左衛門他	同上	古8
1627	10	22	弥太郎	墨塗	アド	弥右衛門・弥二兵衛	同上	古8
1627	10	22	弥太郎	栗焼	アド	熊蔵	同上	古8
1627	10	22	弥太郎	楽阿弥	アド	弥右衛門・弥二兵衛他	同上	古8
1627	10	22	弥太郎	能安宅	アドアイ	北七大夫	同上	古8
1627	10	29	弥太郎	三番三		今春七郎	大御所秀忠藤堂和泉守高虎邸御成能	古8
1627	10	29	弥太郎	能嵐山／申楽	シテ		同上	古8
1627	10	29	弥太郎	すゑひろかり	アド	弥右衛門・弥次兵衛	同上	古8
1627	10	29	弥太郎	鼻取相撲	アド	弥右衛門・八右衛門	同上	古8
1627	10	29	弥太郎	盤山伏	アド	弥右衛門・喜左衛門	同上	古8
1627	10	29	弥太郎	能花月	アイ	今春七郎	同上	古8
1627	10	29	弥太郎	能盛久	アイ	北七大夫	同上	古8
1627	10	29	弥太郎	地蔵舞	アド	熊蔵	同上	古8
1627	10	29	弥太郎	宗論	アド	弥右衛門・弥二兵衛	同上、御所望	古8
1627	10	29	弥太郎	能百万	アイ	北七大夫	同上、御所望	古8
1627	11	3	弥太郎	三番三		今春七郎	将軍家光藤堂和泉守高虎邸御成能	古8
1627	11	3	弥太郎	能高砂	アイ	今春七郎	同上	古8
1627	11	3	弥太郎	水懸むこ	アド	弥右衛門・弥二兵衛	同上	古8
1627	11	3	弥太郎	昆布売	アド	熊蔵	同上	古8
1627	11	3	弥太郎	ぶす	アド	弥右衛門・八右衛門	同上	古8
1627	11	3	弥太郎	能天鼓	アイ	今春七郎	同上	古8
1627	11	3	弥太郎	あかゝり	アド	熊蔵	同上	古8
1627	11	3	弥太郎	能三井寺	アドアイ	北七大夫	同上	古8
1628	3	4	弥太郎	三番三		観世三十郎	大御所秀忠紀伊大納言頼宣邸御成能	古8
1628	3	4	弥太郎	能竹生嶋	アイ	観世三十郎	同上	古8
1628	3	4	弥太郎	音曲むこ	シテ	弥右衛門・権之丞他	同上	古8
1628	3	4	弥太郎	墨ぬり	アド	仁右衛門・権之丞	同上	古8
1628	3	4	弥太郎	能天鼓	アイ	北七大夫	同上	古8
1628	3	4	弥太郎	口まね	アド	熊蔵・喜太郎	同上	古8
1628	3	12	弥太郎	千歳		今春七郎	大御所秀忠伊達陸奥守政宗邸御成能	古8
1628	3	12	弥太郎	能白髭／道者	アド	弥右衛門他	同上	古8
1628	3	12	弥太郎	夷毘沙門	アド	弥右衛門・権之丞	同上	古8
1628	3	12	弥太郎	今参	アド	弥右衛門・熊蔵	同上	古8
1628	3	12	弥太郎	能自然居士	アイ	桜井八右衛門	同上	古8
1628	3	12	弥太郎	楽阿弥	アド	弥右衛門・喜左衛門	同上	古8
1628	3	14	弥太郎	三番三		今春七郎	将軍家光紀伊大納言頼宣邸御成能	古8
1628	3	14	弥太郎	能白楽天	アイ	今春七郎	同上	古8
1628	3	14	弥太郎	あさう	アド	弥右衛門・八右衛門他	同上	古8
1628	3	14	弥太郎	口まね	アド	熊蔵・喜太郎	同上	古8
1628	3	14	弥太郎	闔羅人	アド	弥右衛門他	同上	古8
1628	3	18	弥太郎	鼻取相撲	アド	弥右衛門・八右衛門	大御所秀忠駿河大納言忠長邸御成能	古8
1628	3	18	弥太郎	能邯鄲	アイ	北七大夫	同上	古8
1628	3	18	弥太郎	ぶす	アド	熊蔵・弥右衛門	同上	古8
1628	3	18	弥太郎	犬山伏	アド	弥右衛門・仁右衛門他	同上	古8
1628	3	21	弥太	能高砂	アイ	金春七郎	金春七郎浅草勧進能初日	控
1628	3	21	弥太	あさう	アド	弥右衛門・八右衛門他	同上	控
1628	3	21	弥太	三人かたは	シテ	八右衛門・市兵衛他	同上	控
1628	3	21	弥太	能三井寺	オモアイ	金春七郎	同上	控
1628	3	21	弥太	たちはい	アド	八右衛門・弥二兵衛	同上	控
1628	3	22	弥太	三番三ゑほし		金春七郎	金春七郎浅草勧進能二日目	控
1628	3	22	弥太	能白髭／道者	アド	弥右衛門	同上、原白髪、道者不記	控
1628	3	22	弥太	ゑひすひしやもん		シテ	市兵衛・八右衛門	同上　控
1628	3	22	弥太	いままいり	アド	弥右衛門・熊蔵	同上	控
1628	3	22	弥太	らくあみ	シテ	市兵衛・弥二兵衛	同上	控
1628	3	23	弥太	三番三子宝		金春七郎	金春七郎浅草勧進能三日目	控
1628	3	23	弥太	能賀茂／田うへ	シテ		同上	控
1628	3	23	弥太	なへ八はち	シテ	弥二兵衛・市兵衛	同上	控
1628	3	23	弥太	花折しんほち	アド	熊蔵他	同上	控
1628	3	23	弥太	能道成寺	アドアイ	金春七郎	同上	控
1628	3	23	弥太	二人太名	アド	八右衛門・弥二兵衛	同上	控

Hosei University Repository

年	月	日	名前	演目	役名	他	備考	資料
1628	3	24	弥太	はうちやうむこ	アド	八右衛門・弥右衛門	金春七郎浅草勧進能四日目	控
1628	3	24	弥太	こふうり	アド	熊蔵	同上	控
1628	3	24	弥太	いぬ山ふし	アド	弥右衛門・弥二兵衛	同上	控
1628	3	24	弥太	能藤永	オモアイ	金春七郎	同上	控
1628	3	24	弥太	ちきりき	シテ	喜左衛門・八右衛門	同上	控
1628	3	26	弥太郎	さつまの守	アド	熊蔵・喜太郎	将軍家光伊達陸奥守政宗邸御成能	古8
1628	3	26	弥太郎	能三井寺	オモアイ	桜井八右衛門	同上	古8
1628	3	26	弥太郎	犬山伏	アド	弥右衛門・弥二兵衛	同上	古8
1628	3	28	弥太郎	唐相撲	アド	仁右衛門・権之丞他	将軍家光江戸城西丸御成能、原秀忠本丸御成	古8
1628	3	28	弥太郎	随方角	アド	弥右衛門・八右衛門	同上	古8
1628	3	28	弥太郎	あかゝり	アド	熊蔵	同上	古8
1628	3	28	弥太郎	能三輪	アイ	北七大夫	同上	古8
1628	3	28	弥太郎	柿山伏	アド	弥右衛門	同上	古8
1628	4	3	弥太郎	三番三		今春七郎	大御所秀忠水戸中納言頼房邸御成能	古8
1628	4	3	弥太郎	能白楽天	アイ	今春七郎	同上	古8
1628	4	3	弥太郎	末広	アド	弥右衛門・弥二兵衛	同上	古8
1628	4	3	弥太郎	さつまの守	アド	熊蔵・喜太郎	同上	古8
1628	4	6	弥太郎	三番三		今春七郎	将軍家光駿河大納言忠長邸御成能	古8
1628	4	6	弥太郎	能白髭／道者	シテ	皆々	同上	古8
1628	4	6	弥太郎	唐相撲	アド	弥右衛門・権之丞他	同上	古8
1628	4	6	弥太郎	昆布売	アド	熊蔵	同上	古8
1628	4	9	弥太郎	鍋八枹	アド	仁右衛門・権之丞	将軍家光水戸中納言頼房邸御成能	古8
1628	4	9	弥太郎	入間川	アド	弥右衛門・喜左衛門	同上	古8
1628	4	9	弥太郎	あかゝり	アド	熊蔵	同上	古8
1628	4	9	弥太郎	能百万	アイ	北七大夫	同上	古8
1628	4	9	弥太郎	悪坊	アド	弥右衛門・八右衛門	同上	古8
1628	5	12	弥太郎	武悪	アド	弥右衛門・仁右衛門	江戸城西丸公家門跡衆饗応能	古8
1628	5	12	弥太郎	いく井	アド	熊蔵・弥右衛門	同上	古8
1628	5	12	弥太郎	太刀奪	アド	弥右衛門・弥二兵衛	同上	古8
1628	5	19	弥太郎	比丘貞	アド	弥右衛門・弥二兵衛	江戸城本丸公家門跡衆饗応能	古8
1628	5	19	弥太郎	能天鼓	アイ	観世三十郎	同上	古8
1628	5	19	弥太郎	腹不立	アド	熊蔵・八右衛門	同上	古8
1628	5	19	弥太郎	あくばう	アド	弥右衛門・市兵衛	同上	古8
1628	5	19	弥太郎	能三井寺	オモアイ	北七大夫	同上	古8
1628	6	11	弥太郎	能嵐山／申舞	シテ		大御所秀忠尾張大納言義直邸御成能	古8
1628	6	11	弥太郎	庖丁むこ	シテ	弥右衛門・八右衛門他	同上	古8
1628	6	11	弥太郎	腹不立	アド	熊蔵・八右衛門	同上	古8
1628	6	11	弥太郎	能葵上	アイ	観世三十郎	同上	古8
1628	6	11	弥太郎	清水	アド	弥右衛門	同上	古8
1628	8	9	弥太郎	三番三		今春七郎	将軍家光尾張大納言義直邸御成能	古8
1628	8	9	弥太郎	能白楽天	アイ	今春七郎	同上	古8
1628	8	9	弥太郎	あさう	アド	弥右衛門・八右衛門他	同上	古8
1628	8	9	弥太郎	入間川	アド	弥右衛門・喜左衛門	同上	古8
1628	8	9	弥太郎	昆布売	アド	熊蔵	同上	古8
1628	8	9	弥太郎	能道成寺	アドアイ	北七大夫	同上	古8
1628	8	9	弥太郎	能自然居士	アイ	北七大夫	同上	古8
1628	8	9	弥太郎	能鉢木	オモアイ	北七大夫	同上	古8
1628	8	9	弥太郎	二人大名	アド	八右衛門・弥右衛門	同上	古8
1628	8	9	弥太郎	八尾	シテ	弥二兵衛	同上	古8
1628	9	26	弥太郎	三番三		今春七郎	大御所秀忠江戸城本丸御成能	古8
1628	9	26	弥太郎	能高砂	アイ	今春七郎	同上	古8
1628	9	26	弥太郎	庭鳥むこ	アド	弥右衛門・八右衛門他	同上	古8
1628	9	26	弥太郎	楽阿み	アド	弥右衛門・弥次兵衛他	同上	古8
1628	9	26	弥太郎	花折	アド	熊蔵他	同上	古8
1628	9	26	弥太郎	能道成寺	アドアイ	今春七郎	同上	古8
1628	9	26	弥太郎	首引	シテ	弥右衛門他	同上	古8
1628	9	26	弥太郎	犬山伏	アド	弥右衛門・弥二兵衛	同上	古8
1629	1	28	弥太郎	腹たゝす	シテ	権之丞	同上	寛永
1629	ウ2	21	弥太郎	三番神初日		北七大夫	北七大夫山王立願能	控
1629	ウ2	21	弥太郎	あさう	シテ	喜左衛門・曽介他	同上	控
1629	ウ2	21	弥太郎	いくね	アド	熊蔵・喜左衛門	同上	控
1629	ウ2	21	弥太郎	しうろん	シテ	喜左衛門・又兵衛	同上	控
1629	4	29	弥太郎	せんし物	アド	弥右衛門	大御所秀忠加賀中納言利常邸御成能	加賀御成
1629	4	29	弥太郎	今参	アド	熊蔵	同上	加賀御成
1629	4	29	弥太郎	能舟弁慶	アイ	北七大夫	同上、シテは御成留候による	加賀御成
1629	4	29	弥太郎	能項羽	アイ		同上	加賀御成
1629	7	23	弥太	三番三		北七大夫	北七大夫浅草勧進能初日	控

Hosei University Repository

年	月	日	名前	演目	役名	他	備考	資料
1629	7	23	弥太	あさう	シテ	喜左衛門・八右衛門他	同上	控
1629	7	23	弥太	はなとりすまふ	アド	弥右衛門・八右衛門	同上	控
1629	7	23	弥太	くひ引	アド	弥右衛門・喜左衛門他	同上	控
1629	7	24	弥太	ひつしきむこ	アド	八右衛門・喜左衛門他	北七大夫浅草勧進能二日目	控
1629	7	24	弥太	犬山ふし	アド	弥右衛門・弥二兵衛	同上	控
1629	7	24	弥太	さつくわ	アド	熊蔵・喜太郎	同上	控
1629	7	24	弥太	にやくいち	アド	弥右衛門・兵吉他	同上	控
1629	7	25	弥太	したうはうかく	アド	八右衛門・弥二兵衛	北七大夫浅草勧進能三日目	控
1629	7	26	弥太	能白髭／道者	シテ	喜左衛門	北七大夫浅草勧進能四日目、原白髪、道者不記	控
1629	7	26	弥太	いもし	アド	熊蔵・八右衛門	同上	控
1629	7	26	弥太	いく井	アド	熊蔵・弥右衛門	同上	控
1629	7	27	弥太	しせんせき	シテ	八右衛門	同上	控
1630	5	18	弥太	はらきらす	シテ	喜左衛門・弥二兵衛	金剛大夫浅草勧進能初日	控
1630	5	18	弥太	ふくろう	アド	弥右衛門・四郎	同上	控
1630	5	19	弥太	三番三		金剛右京	金剛大夫浅草勧進能二日目	控
1630	5	19	弥太	なへ八はち	アド	八右衛門・弥二兵衛	同上	控
1630	5	19	弥太	はき大名	アド	熊蔵・喜太郎	同上	控
1630	5	19	弥太	連歌盗人	シテ	市兵衛・八右衛門	同上	控
1630	5	20	弥太	にわとりむこ	アド	熊蔵・市兵衛他	金剛大夫浅草勧進能三日目	控
1630	5	20	弥太	すみぬり	シテ	弥二兵衛・八右衛門	同上	控
1630	5	20	弥太	能道成寺	オモアイ	金剛右京	同上	控
1630	5	20	弥太	あさいな	シテ	弥右衛門	同上	控
1630	5	21	弥太	らうむしや	アド	弥右衛門他	金剛大夫浅草勧進能四日目	控
1633	3	3	弥太郎	いるま川	シテ	喜左衛門・市兵衛	江戸城将軍家光代替り祝賀能	控
1633	3	3	弥太郎	能三井寺	アイ	北七大夫	同上	控
1633	3	3	弥太郎	はらたてす	シテ	喜左衛門・喜太郎	同上	控
1633	4	11	弥太郎	三番三		金春七郎	江戸城公家衆饗応能	控
1633	4	11	弥太郎	能白楽天	アイ	金春七郎	同上	控
1633	4	11	弥太郎	ひつしきむこ	シテ	弥右衛門・喜左衛門	同上	控
1633	4	11	弥太郎	かんぬす人	アド	弥右衛門・弥次兵衛	同上	控
1633	6	22	弥太	三番三		金春七郎	将軍家光江戸城西丸御成能	控
1633	6	22	弥太	能賀茂	アイ	金春七郎	同上	控
1633	6	22	弥太	末広	アド	弥右衛門・八右衛門	同上	控
1633	6	22	弥太	悪房	アド	弥右衛門	同上	控
1633	6	22	弥太	薩广守	シテ船頭	八右衛門・四郎	同上	控
1633	6	25	弥太	やわたのまへ	アド	八右衛門・喜左衛門他	北七大夫深川勧進能初日	控
1633	6	25	弥太	ふすまう	シテ	弥二兵衛・喜太郎	同上	控
1633	6	25	弥太	かなづ	アド	長吉・八右衛門他	同上	控
1633	6	26	弥太	能賀茂／田うへ	シテ		北七大夫深川勧進能二日目	控
1633	6	26	弥太	したうはうかく	シテ	八右衛門・喜太郎	同上	控
1633	7	18	弥太	さつまのかみ	アド	八右衛門・喜太郎	北七大夫深川勧進能三日目	控
1633	7	18	弥太	ふあく	アド	八右衛門・弥右衛門	同上	控
1633	7	19	弥太	あわた口	シテ	八右衛門・弥二兵衛	北七大夫深川勧進能四日目	控
1633	7	19	弥太	あさいな	アド	弥右衛門	同上	控
1633	7	20	弥太	いくゐ	アド	八右衛門・弥二兵衛	北七大夫深川勧進能五日目	控
1634	7	21	弥太	ひけやくら	アド	弥右衛門他	二条城公家諸大名饗応能	控
1634	9	1	弥太	いるま川	アド	弥右衛門・八右衛門	仙洞御所観世喜多立合能初日	控
1634	9	1	弥太	子ぬす人	アド	弥右衛門・弥次兵衛	同上	控
1634	9	1	弥太	あくはう	アド	弥右衛門・八右衛門	同上	控
1634	9	2	弥太	三番神		七大夫	仙洞御所観世喜多立合能後日	控
1634	9	2	弥太	能賀茂／田植	シテ	皆々	同上	控
1634	9	2	弥太	せんし物	アド	弥右衛門他	同上	控
1634	9	2	弥太	ちしやく	アド	弥右衛門・喜太郎	同上	控
1634	9	2	弥太	三人かたわ	アド	弥右衛門・八右衛門他	同上	控
1634	9	2	弥太	なかみつ	シテ	権之丞・八右衛門	同上、前期は弥右衛門	控
1634	9	2	弥太郎	三番三		七大夫	仙洞御所観世喜多立合能後日	前期
1634	9	2	弥太郎	長光	シテ		仙洞御所観世喜多立合能後日、三拾八歳	雲上
1634	10	7	弥太郎	ひくさだ	アド	弥右衛門	江戸城本丸公家衆饗応能	寛永
1635	1	28	弥太郎	能道成寺	アドアイ	永井日向守	江戸城二の丸松平陸奥守政宗茶事能	寛永
1635	1	28	弥太郎	ぼんさん	シテ		同上	寛永
1635	3	30	弥太郎	藤松	アド	権之丞	江戸城二の丸茶事能	寛永
1635	6	25	弥太郎	いるま川	アド	弥右衛門・八右衛門	江戸城本丸能	控
1635	6	25	弥太郎	ちきりき	アド	弥右衛門・弥次兵衛他	同上	控
1635	8	18	弥太郎	らくあみ	シテ		江戸城二の丸水戸中納言頼房茶事能	寛永
1635	8	20	弥太郎	茶つぼ	シテ		江戸城二の丸井伊掃部頭直孝茶事能	寛永
1635	10	28	弥太郎	式三番		本多美作守	江戸城二の丸水戸中納言頼房茶事能	寛永
1636	5	10	弥太郎	きんや	アド	弥右衛門・八右衛門	江戸城日光祭礼済祝賀公家門跡諸大名饗応能	控

Hosei University Repository

年	月	日	名前	演目	役名	他	備考	資料
1636	5	10	弥太郎	あさいな	アド	弥右衛門	同上	控
1636	5	10	弥太郎	能獅子	アイ	北七大夫	同上	控
1636	5	11	弥太郎	三番三		今春	江戸城日光祭礼済祝賀旗本出家衆饗応能	控
1636	5	11	弥太郎	ゑひす大こく	アド	弥右衛門・喜左衛門	同上	控
1636	5	11	弥太郎	三番叟		金春八左衛門	江戸城日光御社参御祝儀御能	日光
1639	4	1	弥太郎	ふし松	シテ		太田備中守資宗邸饗応能	寛永
1639	4	1	弥太郎	ふす	シテ		同上	寛永
1639	4	6	弥太郎	三番三		北七大夫	春日局邸慰み能	古9
1639	4	6	弥太郎	能賀茂	アイ	北七大夫	同上	古9
1639	4	6	弥太郎	宗論	シテ	喜左衛門・作十郎	同上	古9
1639	4	6	弥太郎	いくゐ	アド	仁右衛門・伝右衛門	同上	古9
1639	4	6	弥太郎	二千石	シテ	八右衛門	同上	古9
1639	4	8	弥太郎	薩摩守	アド	八右衛門・弥次兵衛	太田備中守資宗邸饗応能	古9
1639	4	8	弥太郎	楽阿弥	シテ	弥次兵衛・市郎兵衛	同上	古9
1639	4	8	弥太郎	さつまの守	シテ		同上	寛永
1639	4	8	弥太郎	らくあみ	シテ		同上	寛永
1639	4	12	弥太郎	三人片輪	シテ		江戸城本丸公家衆饗応能、月日は寛永	古9
1639	4	12	弥太郎	犬山伏	アド	仁右衛門	同上	古9
1639	4	12	弥太郎	三人かたわ	シテ		同上	寛永
1639	4	12	弥太郎	犬山伏	アド	鶯	同上	寛永
1639	4	17	弥太郎	夜毘沙門	シテ	八右衛門・弥次兵衛	江戸城二の丸慰み能	古9
1639	4	22	弥太郎	三番三		観世大夫	江戸城本丸諸大名饗応能、月日は寛永	古9
1639	4	22	弥太郎	なへ八桙	シテ	喜左衛門・弥次兵衛	同上	古9
1639	4	22	弥太郎	いくゐ	アド	仁右衛門	同上	古9
1639	4	22	弥太郎	鍋八はち	シテ		江戸城本丸諸大名饗応能	寛永
1639	4	22	弥太郎	いくゐ	シテ	鶯	同上	寛永
1639	4	29	弥太郎	福の神	シテ	八右衛門・喜左衛門	江戸城安部豊後守忠秋茶事能か、月日は実紀	古9
1639	4	29	弥太郎	宗論	アド	仁右衛門・伝右衛門	同上	古9
1639	4	*	弥太郎	粟田口	シテ	八右衛門・右衛門太郎	池田相模守光仲邸喜多流能、月日なし	古9
1639	4	*	弥太郎	枕物狂	シテ	金右衛門	同上	古9
1639	5	7	弥太郎	能八嶋／那須与一	シテ		江戸城二の丸松平伊豆守信綱茶事能	古9
1639	5	7	弥太郎	犬山伏	アド	仁右衛門・伝右衛門	同上	古9
1639	6	8	弥太郎	あさう	シテ	八右衛門・四郎兵衛他	前田筑前守光高邸祝賀能	古9
1639	6	8	弥太郎	宗論	シテ	八右衛門・作十郎	同上	古9
1639	6	8	弥太郎	いくゐ	シテ	仁右衛門・伝右衛門	同上	古9
1639	6	8	弥太郎	ふあく	シテ	仁右衛門・喜左衛門	同上	古9
1639	6	8	弥太郎	福の神	アド	八右衛門・喜左衛門	同上	古9
1639	6	24	弥太郎	蚊相撲	シテ	八右衛門・弥次兵衛	堀田加賀守正盛邸天海僧正饗応能	古9
1639	6	24	弥太郎	いくゐ	アド	仁右衛門・八右衛門	同上	古9
1639	7	17	弥太郎	二千石	シテ	八右衛門	江戸城二の丸朽木民部少輔稙綱茶事能	古9
1639	7	17	弥太郎	能道成寺	アドアイ	北七大夫	同上	古9
1639	9	17	弥太郎	ふくろう	アド	源五左衛門・四郎兵衛	江戸城二の丸慰み能	古9
1639	9	23	弥太郎	くらま参	シテ	八右衛門	尾張徳川家婚礼祝賀能初日	古9
1639	9	25	弥太郎	鐘	アド	八右衛門・弥次兵衛	尾張徳川家婚礼祝賀能後日	古9
1639	9	29	弥太郎	舞もちさけ	シテ		江戸城二の丸略式演能	古9
1639	10	4	弥太郎	蟷庖丁	シテ	作十郎	江戸城二の丸狂言尽	古9
1639	10	4	弥太郎	薩摩守	アド	八右衛門・四郎兵衛	同上	古9
1639	10	4	弥太郎	瓜盗人	シテ	八右衛門・弥次兵衛	同上	古9
1639	10	4	弥太郎	いくゐ	アド	八右衛門・喜左衛門	同上	古9
1641	4	25	弥太郎	連歌盗人	シテ	八右衛門・喜左衛門	江戸城本丸公家衆饗応能	古9
1641	4	25	弥太郎	連歌盗人	シテ		江戸城本丸公家衆饗応能	寛永
1641	6	13	弥太郎	能賀茂／田うへ	シテ		八丁堀朗清寺喜多父子法楽能	控
1641	6	13	弥太郎	まくら物狂	シテ	喜左衛門・四郎兵衛他	同上	控
1641	9	9	弥太郎	いくゐ	シテ	八右衛門	江戸城本丸若君誕生祝賀能初日	寛永
1641	9	11	弥太郎	ゑひす毘沙門	シテ		江戸城本丸若君誕生祝賀能二日目	寛永
1641	9	17	弥太郎	犬山伏	シテ	八右衛門・四郎兵衛	江戸城二の丸若君誕生祝賀能	古9
1641	9	19	弥太郎	末広	シテ	喜左衛門・作十郎	烏津薩摩守光久邸老中招請能	古9
1641	9	23	弥太郎	犬山伏	シテ		松平新太郎光政邸振舞能	寛永
1641	10	6	弥太郎	目近	シテ	弥次兵衛・佐左衛門他	伊達陸奥守忠宗邸若君誕生祝賀老中招請能	古9
1641	10	8	弥太郎	宗論	シテ	喜左衛門・六兵衛	伊達陸奥守忠宗邸老中招請後宴能	古9
1641	10	19	弥太郎	ふすまふ	シテ		江戸城本丸公家衆饗応能	寛永
1641	11	26	弥太郎	あわた口	シテ		加藤式部少輔明成邸能	寛永
1641	11	26	弥太郎	ひくさた	シテ		同上	寛永
1642	1	27	弥太郎	あさふ	シテ	喜左衛門	松平相模守光仲邸祝賀能	寛永
1642	4	9	弥太郎	らくあみ	シテ		将軍家光堀田加賀守正盛邸御成能、日は城	寛永
1642	4	28	弥太郎	よね市	シテ		江戸城本丸日光社参済祝賀能	寛永
1642	5	10	弥太郎	ひく定	シテ		土井大炊頭利勝邸物頭衆振舞能	寛永

Hosei University Repository

年	月	日	名前	演目	役名	他	備考	資料
1642	5	15	弥太郎	ゑひすひしやもん	シテ		江戸城本丸日光法事済祝賀能	寛永
1642	6	8	弥太郎	犬山ふし	シテ		酒井讃岐守忠勝邸旗本衆饗応能	寛永
1642	8	3	弥太郎	すへひろかり	シテ		江戸城二の丸松平伊豆守倡綱茶事能	寛永
1643	7	18	弥太郎	ゑひすひしやもん	シテ	八右衛門	江戸城本丸朝鮮人御馳走能	行幸仙洞
1645	2	14	弥右衛門	狂言			薪能二日目南大門能	薪
1645	11	3	弥右衛門	福のかみ	シテ	八右衛門・喜左衛門	大納言家綱井伊掃部頭直孝邸御成能	控
1646	3	17	弥右衛門	すはじかみ	シテ	長吉	弥太郎興行道春五十年忌狂言尽、原弥左衛門	控
1646	3	17	弥右衛門	枕物狂	シテ	豊右衛門・一郎兵衛他	同上	控
1646	3	17	弥右衛門	二千石	シテ	又兵衛	同上	控
1648	4	26	弥右衛門	いぐゐ	シテ	佐左衛門・弥二兵衛	日光東照宮家康三十三年忌能初日	控
1648	4	26	弥右衛門	しうろん	アド	仁右衛門	同上	控
1648	4	26	弥右衛門	あさいな	シテ	豊右衛門	同上	控
1648	4	26	弥右衛門	いくゐ	シテ		日光東照宮家康三十三年忌能初日	行幸仙洞
1648	4	26	弥右衛門	宗論	アド	仁右衛門	同上	行幸仙洞
1648	4	26	弥右衛門	あさいな	シテ		同上	行幸仙洞
1648	4	27	弥右衛門	能賀茂／田うへ	シテ		日光東照宮家康三十三年忌能後日	控
1648	4	27	弥右衛門	ゑびすびしやもん	シテ	佐左衛門・豊右衛門	同上	控
1648	4	27	弥右衛門	しうくがらかさ	シテ	弥次兵衛・太兵衛	同上	控
1648	4	27	弥右衛門	文山だち	シテ	弥次兵衛	同上	控
1648	4	27	弥右衛門	ゑひすひしやもん	シテ		日光東照宮家康三十三年忌能後日	行幸仙洞
1648	4	27	弥右衛門	しうくからかさ	シテ		同上	行幸仙洞
1648	4	27	弥右衛門	文山たち	シテ		同上	行幸仙洞
1651	8	22	弥右衛門	いくゐ	シテ	弥太郎・八右衛門	家綱将軍宣下能初日	控
1651	8	22	弥右衛門	井杭	シテ		同上	宜
1651	9	5	弥右衛門	三番叟		金春元倡	家綱将軍宣下能二日目	宜
1651	9	5	弥右衛門	麻生	シテ		同上	宜
1651	9	22	弥右衛門	目近米骨	シテ		家綱将軍宣下能三日目	宜
1651	11	8	弥右衛門	かくれがさ	シテ	長大夫・弥二兵衛	江戸城本丸座敷能	控
1652	11	28	弥右衛門	神崎	アド渡し守	八右衛門	春日若宮祭礼後日能、薩摩守	若宮
1653	2	6	弥右衛門	八幡前	シテ	八右衛門・弥二兵衛他	薪能初日南大門能	古2
1653	2	6	弥右衛門	八幡前	シテ	八右衛門・弥次兵衛	薪能初日南大門能	薪
1653	2	8	弥右衛門	あさう	アド	弥太郎・弥二兵衛他	薪能三日目御社上り、薪は「狂言」、役者名なし	古2
1653	8	16	弥右衛門	末広	シテ	長大夫・佐左衛門	江戸城本丸公家衆饗応能	古9
1654	2	6	弥右衛門	二千石	シテ	弥二兵衛	薪能初日南大門能、殊外出来之由	古2
1654	2	6	弥右衛門	ジセン石	シテ	弥次兵衛	薪能初日南大門能	薪
1654	2	10	弥右衛門	庭鳥むこ	アドしうと	八右衛門・弥二兵衛他	薪能三日目御社上り、薪は弥右衛門ナシ	古2
1654	11	28	弥右衛門	腹タテズ	シテ	弥太郎・弥次兵衛	春日若宮祭礼後日能	若宮
1655	2	6	弥右衛門	ワラハ	シテ	弥次兵衛	薪能初日南大門能、をこさこイ	薪
1655	2	13	弥右衛門	節分ノ夜	シテ	弥次兵衛・弥太郎	薪能三日目御社上り、ふくの神イ	薪
1655	3	21	弥右衛門	いくゐ	シテ	金右衛門・小兵衛	堺七堂勧進狂言初日	明暦
1655	3	21	弥右衛門	しせんせき	シテ	弥次兵衛	同上	明暦
1655	3	21	弥右衛門	三人かたわ	シテ	八右衛門・弥太郎他	同上	明暦
1655	3	23	弥右衛門	いま参	シテ	弥次兵衛・平左衛門	堺七堂勧進狂言二日目	明暦
1655	3	23	弥右衛門	枕物狂	シテ	清十郎・甚兵衛他	同上	明暦
1655	3	23	弥右衛門	ふあく	シテ	弥次兵衛・太左衛門	同上	明暦
1655	3	25	弥右衛門	ひくさた	シテ	藤二郎・久太郎	堺七堂勧進狂言三日目	明暦
1655	3	25	弥右衛門	ほうしか母	シテ	小兵衛	同上	明暦
1655	3	25	弥右衛門	連歌盗人	シテ	清十郎・孫左衛門	同上	明暦
1655	3	26	弥右衛門	はなこ	シテ	弥次兵衛・太左衛門	堺七堂勧進狂言四日目	明暦
1655	3	26	弥右衛門	しうろん	シテ	金右衛門・二郎左衛門	同上	明暦
1655	3	27	弥右衛門	すみぬり	シテ	小兵衛・太左衛門	堺七堂勧進狂言五日目	明暦
1655	3	27	弥右衛門	すわうおとし	シテ	清十郎・弥次兵衛	同上	明暦
1655	3	27	弥右衛門	さつまのかみ	シテ	与三右衛門・市左衛門	同上	明暦
1655	3	29	弥右衛門	はなこ	シテ	弥次兵衛・次右衛門	石河土佐守邸狂言尽	明暦
1655	3	29	弥右衛門	かき山ふし	シテ	小兵衛	同上	明暦
1655	3	29	弥右衛門	うつほさる	シテ	弥次兵衛・太左衛門他	同上	明暦
1655	7	24	弥右衛門	今参	シテ	小兵衛	弥右衛門宅小幡勘兵衛景憲招待狂言尽	古5
1655	7	26	弥右衛門	二人袴	シテ	太左衛門・弥二兵衛他	江戸城二の丸慰み能	古5
1655	7	26	弥右衛門	米一	シテ	弥次兵衛・八右衛門他	同上	古5
1655	7	26	弥右衛門	金頭地蔵	シテ	佐左衛門・八右衛門他	同上	古5
1655	8	17	弥右衛門	祢宜山伏	シテ	弥二兵衛・太左衛門他	江戸城二の丸慰み能	古5
1655	8	17	弥右衛門	伯婆	シテ	弥次兵衛・太左衛門	同上	古5
1655	8	17	弥右衛門	唐相撲	シテ	長大夫・弥次兵衛他	同上	古5
1655	8	22	弥右衛門	舞もちさけ	シテ	八右衛門・長大夫	大久保加賀守忠職邸酒井雅楽頭忠清婚応囃子	古5
1655	8	22	弥右衛門	舞うかひ	シテ		同上	古5
1655	8	22	弥右衛門	ぶす	シテ	八右衛門・長大夫	同上	古5
1660	2	7	弥右衛門	文相撲	シテ	弥二兵衛・太左衛門	薪能初日南大門能、薪は弥太郎・めかくし	古2
1661	11	28	弥右衛門	狂言	シテ	弥太郎・弥次兵衛	春日若宮祭礼後日能	若宮

Hosei University Repository

【別表２】上演曲目対照表

曲　名	虎　清	虎　明	清　虎	虎清本	虎明本	寛文書上	異曲名
青海苔					○		
鞁	○	○アド	○		○	○	
芥川					○		
悪太郎	○アド				○	○	
悪坊	○	○アド	○		○	○	
朝比奈	○	○	○		○	○	
麻生	○	○	○		○	○	烏帽子折
合柿					○	○	
粟田口	○	○	○		○	○	
あん太郎	○						吃か
居杭	○	○	○		○	○	
石神	○アド	○アド			○		
伊勢山伏			○				禰宜山伏
因幡堂					○	○	
犬山伏	○	○	○		○	○	
今神明					○		
今参	○	○	○○舞		○	○	今参大名
今参大名	○						今参
伊文字		○アド	○アド		○	○	
入間	○						入間川
入間川	○	○	○		○	○	入間
伊呂波					○	○	いろは問答
いろは問答			○アド				伊呂波
岩橋					○		
魚説経					○		
牛博労					○		
靭猿	○	○	○		○	○	
瓜盗人	○アド				○	○	
右流左止					○		
餌差					○		
夷大黒	○	○アド			○	○	
夷毘沙門	○	○	○		○	○	
烏帽子折	○						麻生
岡太夫	○				○	○	
起上りこほし			○				二人大名
右近左近		○			○	○	わらは
御茶の水					○	○	
鬼瓦			○		○	○	
鬼清水			○				清水
鬼の継子					○	○	
伯母ケ酒			○		○	○	
おひやし					○		
折紙聟					○		
音曲聟	○	○	○アド		○	○	
懐中聟					○		
鏡男				○	○	○	
柿山伏	○	○	○		○	○	
かくすい					○		
かくすい聟					○		
隠笠		○			○	○	

Hosei University Repository

曲　名	虎　清	虎　明	清　虎	虎清本	虎明本	寛文書上	異曲名
蚊相撲		○	○		○	○	蚊之相撲
歌仙					○		
金津		○アド	○アド			○	金津地蔵
金津地蔵		○	○アド		○		金津
金若					○		
蟹山伏	○	○アド	○	○	○	○	
鐘の音					○	○	
蚊之相撲			○				蚊相撲
鎌腹						○	腹きらず
神鳴	○アド				○	○	
川上					○		
河原太郎					○	○	
鴈雁金	○アド		○舞		○	○	
神崎		○アド	○				薩摩守・ただのり
鴈礫	○	○アド			○	○	
鴈盗人	○	○	○アド		○	○	
祇園					○		
不聞座頭		○	○		○	○	
ぎしやく	○						磁石
狐塚	○	○アド			○	○	
牛馬	○	○アド			○	○	
金藤左衛門					○		
禁野	○	○アド	○	○	○	○	
杭か人か					○		
菌					○		
鬮罪人	○	○アド	○		○	○	
口真似	○	○	○		○	○	
口真似聟					○		
首引	○	○	○アド		○	○	
くも					○		
鞍馬参	○○舞	○○舞	○		○	○	
栗焼	○アド	○	○		○	○	
鶏猫					○		
鶏泣					○	○	
乞聟					○		
柑子					○	○	
柑子俵					○		
膏薬煉			○アド		○	○	
腰折	○	○アド			○	○	
御前座頭	○				○		
子盗	○					○	子盗人・盗人の子
子盗人	○	○アド	○			○	子盗・盗人の子
菓争					○		
昆布売	○	○アド	○		○	○	
昆布柿	○				○	○	
こんくわい	○						釣狐
賽の目	○アド	○			○	○	
さいほう					○		
ささい					○		
座禅					○		
察化		○アド	○		○	○	見乞の察化
薩摩守	○	○	○		○	○	神崎・ただのり

Hosei University Repository

曲　名	虎　清	虎　明	清　虎	虎清本	虎明本	寛文春上	異曲名
座頭	○						
狼座頭	○	○アド	○アド	○	○	○	
狼聟	○				○		
三国の百姓					○		
三人片輪	○	○	○		○	○	
三人の長者					○		
三人夫	○アド○舞	○舞	○○舞		○	○	
三本柱	○	○アド	○		○	○	
地獄僧					○		
磁石	○	○アド	○		○	○	ぎしやく
二千石	○	○	○アド		○	○	
地蔵舞		○			○	○	
止動方角	○	○	○		○	○	
痺	○		○アド		○	○	
清水	○	○アド			○	○	鬼清水
舎弟			○		○	○	
秀句傘	○	○	○		○	○	
宗論	○	○	○		○	○	
柱杖					○		
真奪	○アド		○		○	○	
末広	○	○	○		○	○	
素袍落	○	○	○		○	○	
鱸庖丁		○	○		○	○	
酢薑		○			○	○	
墨塗	○	○	○		○	○	
相撲		○					大名
すり			○				
政頼			○アド		○	○	
節分	○アド	○	○		○	○	
節分の夜		○					福の神
蝉					○		
煎物	○	○アド	○		○	○	
惣八			○		○	○	
空腕					○	○	
大黒連歌			○		○	○	
大名	○アド						相撲
宝の槌	○		○		○	○	槌
竹の子	○	○アド			○	○	
蜻					○	○	
ただのり	○						神崎・薩摩守
太刀奪	○	○アド	○		○	○	
樽聟	○アド				○		無縁聟
俵藤太	○						米市
千切木	○	○	○		○	○	棒千切木
竹生島参						○	ぬらぬら
千鳥					○	○	
茶壺	○アド	○	○		○	○	
忠喜					○		
通円			○		○	○	
筑紫奥	○アド				○	○	
槌	○アド						宝の槌
釣狐	○	○アド	○		○	○	こんくわい

Hosei University Repository

曲　名	虎　清	虎　明	清　虎	虎清本	虎明本	寛文雀上	異曲名
釣針					○		
手車	○						鈍太郎
唐人相撲	○		○				唐相撲
唐相撲	○	○			○	○	唐人相撲
時					○		
どちはぐれ					○		
飛越	○	○	○		○	○	
土筆			○		○	○	
井礎	○	○アド	○		○	○	
吃	○				○	○	あん太郎
鈍根草				○	○		
鈍太郎	○	○アド			○	○	手車
長光	○	○	○アド		○	○	
泣尼				○	○		
名取川			○アド		○	○	
鍋八撥	○	○	○		○	○	
腥物					○		
業平餅	○アド						
成上					○	○	
鳴子					○		
縄綯					○	○	
仁王					○		
二九十八		○			○		
若市	○	○アド	○		○	○	
鶏聟	○	○	○		○	○	
抜殻	○	○アド	○		○	○	
塗師	○アド				○	○	
盗人	○						
盗人蜘蛛					○		
盗人の子	○	○アド			○		子盗・子盗人
ぬらぬら			○○舞		○		竹生島参
禰宜山伏		○	○		○	○	伊勢山伏
寝替					○		
寝声					○		
祝言神楽					○		
萩大名	○	○アド	○		○	○	
博奕十王					○		
伯養	○	○			○	○	
博労					○		
八句連歌	○	○アド			○	○	
鉢叩					○		
花争					○	○	
花折		○アド	○アド			○	花折新発意
花折新発意	○アド	○			○		花折
花子	○	○	○		○	○	
鼻取	○アド						鼻取相撲
鼻取相撲	○	○アド	○アド		○	○	鼻取
花盗人	○アド	○	○アド		○		
腹きらず		○			○		鎌腹
腹不立	○	○	○		○	○	腹不立の正直坊
腹不立の正直坊	○アド						腹不立
張蛸					○		

Hosei University Repository

曲　名	虎　清	虎　明	清　虎	虎清本	虎明本	寛文巻上	異曲名
比丘定	○	○	○		○	○	
髭櫓	○	○アド			○	○	
毘沙門					○		
引括			○		○	○	引括女
引括女			○				引括
引敷舁	○	○	○		○	○	
人馬					○	○	
樋の酒					○		
武悪	○	○	○		○	○	
吹取					○		
福の神	○	○	○		○	○	節分の夜
梟	○	○			○	○	
富士松		○	○アド		○	○	
附子	○	○	○		○	○	
文相撲	○	○	○		○	○	
無布施経					○	○	
二人大名	○アド	○	○		○	○	起上りこぼし
二人袴	○	○	○		○	○	
仏師	○				○	○	
船渡舁						○	船渡り舁
船渡り舁					○		船渡舁
舟船	○		○		○	○	
文荷				○	○		
文山立	○	○	○		○	○	
文蔵	○				○	○	
法師ケ母	○	○			○	○	
棒縛	○	○アド			○	○	
ほうじやう					○		
棒千切木			○				千切木
庖丁舁	○	○	○		○	○	
茫々頭					○	○	
骨皮	○	○アド	○		○	○	
盆山	○	○			○	○	
枕物狂	○	○	○		○	○	
松脂		○			○	○	
松山					○		
松樑			○○舞		○		
継子					○		
鞠座頭					○		
饅頭					○		
箕被					○		
見乞察化	○アド	○					察化
水掛	○アド						水掛舁
水掛舁	○	○	○		○	○	水掛
御年貢	○アド						
眉目吉					○		
無縁舁	○	○アド					樽舁
舁入り		○	○アド				
舁入天狗					○		
胸突					○	○	
目近	○アド	○				○	目近込骨
目近込骨	○	○			○		目近

Hosei University Repository

曲　名	虎　清	虎　明	清　虎	虎清本	虎明本	寛文書上	異曲名
餅酒	○○舞	○舞	○舞		○	○	
八尾	○	○	○		○	○	
薬水	○		○アド	○	○		
痩松					○	○	
山立	○						
遣子					○		
八幡前	○アド	○	○		○	○	八幡聟
八幡聟			○				八幡前
祐善	○アド				○	○	
横座	○アド				○	○	
米市	○	○	○アド		○	○	俵藤太
呼声					○		
鎧	○アド	○アド	○		○	○	
楽阿弥	○	○	○		○	○	
連歌十徳					○		
連歌盗人	○	○	○		○	○	
連歌毘沙門	○				○	○	
連雀					○		
老武者	○	○アド			○	○	
六地蔵					○		
呂蓮					○	○	
若菜	○		○アド		○		
わらは		○					右近左近か